
ネットゲーム、始めました

部屋内妄想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットゲーム、始めました

【Nコード】

N2812X

【作者名】

部屋内妄想

【あらすじ】

ゲーム経験のない高校生新堂かなめは、同級生の少女早崎伊織に誘われオンラインゲームを始めることに

オンラインゲームの世界を舞台に繰り広げられるほのぼののコメディー

第一話・『ネットゲーム、初めて聞きました』

「あちっ！」

右手の親指に熱いお湯がかかり、思わず手を離しそうになったが、そうするとカッププラーメンの中身がアスファルトにブチマケることになるので俺は我慢した。

特売で買った九十八円のカップめんとはいえ、一口も食べずにこぼすのは勿体ないし罰が当たる。神様に、それと。ちゃんにもだ。ところで先程から道行く方々がすれ違いざまに俺の右手に注目してるのは何故だろう。カップめんを持ちながら歩く人がそんなに珍しいか。

いや、単にこれから向かうところが徒歩三分くらいで丁度家を出る時に小腹が空いたから、ならばとお湯を入れて持って出ただけだから。時間の有効活用だから。

そう道行く主婦に丁寧に説明したい気持ち堪えながら、視線を合わせないように左手に持ったプリントを意味もなく見る。

内容はなんてこともなく、迫る中間テスト範囲が書かれただけのものだ。俺も貰って今はくしゃくしゃになってゴミ袋の中でおしくらまんじゅう状態だ。明日の朝は燃えるゴミの日だしな。

そうだ。今、俺が持つプリントは俺のではない。本来帰りのホームルームに教室に居れば受け取れたはずのそれを、俺はわざわざ病欠した生徒に届けに向かっている最中だ。

友人でもなく、会話を交わしたことすらなのに、どうして俺が届け役を任されたのかというと家が近いという、たったそれだけの単純明快な理由だ。友人が携帯メールで送ればいいものかとも思うが、そいつは友人もおらず携帯も持ってないようで、困った末に俺に頼んだというわけだ。

人付き合いが不得手な俺でさえ一人、今の高校にいるのに、一人もいないとは……確かにそいつが誰かと会話してるところを見たこ

とはないし、むしろ拒絶しているようにも見える。誰かが話しかけても素っ気ない反応をしているし、まるで影のような存在感で教師に指されところも見たことはない。

クラスでは浮いた存在。

それが俺の早崎伊織の印象だった。

「……くずれ荘。相変わらずベストネーミングだな」

アパート名が彫られた長年の月日の経過を物語るくすんだ木の板を眺め、俺は呆れ半分に感心して呟いた。

名は体を表すの見本にしたいその建物は、確かに台風一過とともに無くなってもおかしくなくくらいにボロい。

築五十年は経ってるらしいからそうなっているも別段変ではないのだが、このアパート名を考えた家主は何を思っ命名したのだろうか。

俺の今し方の呟きを引き出すために名付けたのだとしたら、かなりの長期計画だったなと素直に感心せざるを得ない。

あまり眺めているとカップめんが伸びてしまっし、さっさと用件を済まそう。

担任の話では早崎の部屋は二〇四号室だったなと、鉄製の錆びた階段をカンカンと響かせて上がる。

事情は知らないが早崎は一人暮らしをしていると聞いた。こんなボロアパートの一室では、様々な憶測が脳内で巡ってしまい、俺は目頭が熱くなる。

噂では頻繁に休むため病弱な令嬢説も流れたが、さすがにお嬢様はこんなところには住まない。日夜バイトで働き詰めた結果体を壊した——という理由の方が納得できる。

そんな悲壮感溢れるストーリーを脳内で創りながら部屋の前に着いた。ネームプレートにも『早崎』とある。

新聞受けに放り込んでいくことも考えたが、病欠ということで様子も見てくるよう担任に頼まれたことを思いだしノックをする。担

任（二十八歳・女・独身）に思春期の生徒を一人暮らしの異性の家に送り込むというのは危険だと忠告してみたが『新堂なら大丈夫だろ』と面白い冗談を訊いたように笑いながら返された。

「……………あ」

返事はなく、カップめんの状態を気に掛けると俺はとんでもない過ちに気付いた。

箸がねえ。

箸がないと熱くて食べれないじゃないか。カップ焼きそばならなんとか手掴みでいけるが、熱々のスープに手をつ突っ込むのは自殺行為だ。俺はバカだ。壁に頭を打ち付けなくなるが痛いからやめた。今すぐ走って返っても、一分半くらい掛かるし、全力疾走するとお湯が暴れて火傷する確率が高い。

ここは、プリントを渡すついでに割り箸でも借りるのがカップめんに対しても最良の判断だ。こいつだって一番美味い時に食べてほしいに決まってる。だろ？

もう一度、強くノックをする。

しかし、返事はなかった。

事態は急を争う。俺は試しにノブを握ると簡単に回った。鍵は掛かってないようだ。不用心だが幸運だ。悪いと思いつつも俺はドアを開いた。

外観からの想像通り部屋はパツと見て六畳一間の手狭な部屋だった。玄関から左を向くと台所があり、汚れた食器が無惨にシンクを埋めていた。食器の泣き声が聞こえてきそうなくらいの酷い有様だ。部屋の奥に視線をやると更に酷い。

角に置かれたゴミ箱は許容量をオーバーしており、そこから溢れたゴミくずが周りに散らばり、足の踏み場もないくらいに衣服やら雑多な物が数多く床に散乱している。

俺は口端をひくかせ、今にも部屋に上がり込みたい衝動に駆られる。

汚いを超越した部屋を見渡していると、早崎の特徴である長い黒

髪が畳に墨汁をこぼしたように広がっているのが見えた。姿は玄關を仕切る引き戸に隠れているが、居留守かよと俺は苛つきながらも、「早崎さん」

そう呼びかけると黒髪がスルスルと戸の向こうに消えていき、少ししてゆったりした足取りで早崎が姿を見せた。

「……誰？」

早崎は顔を歪ませ気怠そうに聞いてきた。

ボサボサの長い髪は自室だからというわけではなくいつもそんな感じだ。身だしなみに無頓着なのを表すように今の格好は、恐らくは中学時代であろう紫のジャージ上下だ。うちの指定は赤だからな別に同級生のオシャレとはかけ離れたジャージ姿を見ても幻滅はしない。俺の妹なんざ休日以外は寝る時を除いてほとんどジャージだ。

しかし、早崎も身だしなみを気にかければいいのにと、余計なお世話かも知れないがいつも思う。顔立ちは整っているのだし人気が出るだろう。告白だってあるかもしれない。

けれども、俺はその一人に加わろうとは思わない。容姿だけで俺は人を好きにはならないし、今言ったことからしても印象は悪くなつたばかりだ。

「隣の席の奴を忘れんなよ」

名前はともかく全くの他人のように「誰？」と聞かれるとは予想外だった。

早崎はゆっくりと首を傾げてから、思いだそうと仮想の教室を浮かべたのか右を向いた。

「いや、そっちは窓だろ」

早崎の席は窓際最後尾だ。隣の席は俺しかない。

言われて早崎は左を向き、そして前を向き、

「あー、見たことある顔。多分」

俺はズルッと古典的リアクションをし、

「多分かよ」

「私はクラスの百分の一くらいしか顔を覚えてない」

と、早崎は薄く笑い胸を張る。ジャージ越しでもボリウムを感じさせる胸がより強調され……って、

「うちのクラスそんなにいないから！　どんなマンモス学級！？　百分の一つてもはや顔のパーツの一部しか覚えてないだろ。というか何で自慢げなんだよ」

「そう。その死んだ魚のような目だけは覚えている」

「目だけかよ！？　酷い言いぐさだな！」

まあ、子供の頃から『やる気を見せる』と先生から目を見てよく言われてきたが。幾ら一所懸命やっけていても言われたのはショックだったな。

「で、誰なの？」

「ああ、俺は新堂要。かなめ……ってヤバイ」

こんな悠長に話をしている間に刻々と乾麺は水分を吸って食べ時を逃してしまう。

俺は腰を九十度に折り頭を深く下げ、頭より高い位置でパンと手を打った。

「頼む。箸を貸してくれ！　一生のお願いだ！」

「……………は？」

ズルズルズル。モグモグモグ。

うん、涙が出るくらいに美味しくはない。麺とスープの状態からして三分オーバーといったところか。うどんにしとけばまだマシだったか。

「何でカップラーメン持つてきてるの？」

呆れたように早崎は俺を見上げ聞いてくる。

俺は部屋に上がらせてもらい、座るスペースもなく立ち食いでラーメンを啜り、早崎はパソコンが置かれた机の前に座っている。

「話せば長くはならない。しいていうなら時間の有用活用だ。それと、箸は洗って返す」

「ハンカチじゃないんだから……というか捨てて。割り箸だし」

こんな見事に割れたのに捨てるのは勿体ない気もするが。ズルズルズル。

「それで、私の隣の席らしい新堂かなめが何の用？」

「何故フルネームなんだよ。つか、呼び捨てかよ」モグモグ。

「リアルで人の名前呼んだことないから。私のことも呼び捨てで構わない。様付きでも可」

「何様ですか……」

しかも、淡々と友達つき合いがなかったような事をカミングアウトされたな。呼んだことないって……今まではどうしてたんだよ。

「先生には先生、両親にはお父さんにお母さん、弟には貴様と呼ん
でた」

弟が不憫だ。俺は食い終わったカップめんをとりあえず台所に置いて……置けないから持ったまま、

「……友達は？」

「いない。いたことがない。リアルでは」

「リアルでは？」

「しいていうならゲームが友達」

うわあ……イタい子がここにいました。友達は簡単にはできないと俺は知っているが、いたことがないと事も無げに言うなんて涙を
禁じ得ない。

「何で泣いているの？」

「いや、何でもない。……ところで早崎は一人暮らししてるらしい
がどうしてなんだ？」

涙を袖で拭いながら、話題を変えようとした質問だったが、高校生が安アパートで一人暮らしというのは海よりも深い理由があるかもしれないし、踏み込むべきではなかったと後悔する。

「私の両親が……」

早崎は、壁際、パソコンの方を向き、ため息を挟む。マズかった質問だったか……

「……ネット回線を引かせてくれなかったから」

「……は？」

「それで実家からじゃ通学に不便な高校に進学して、一人暮らしをさせてもらって、仕送りをやりくりしてパソコンを買って、回線を引いたの」

「何でそこまでしてネットしたいんだ」

涙なくしては聞けないような話じゃなくて安堵はしたが。

「ネットゲームしてみたかったから」

淡々と早崎は答えた。

「ネットゲーム？」

聞き馴染みのない単語に俺は首を傾げた。俺は家庭で禁止令が出てるわけでもないが、ゲームには関心がなく知識が薄い。しかし、それでも単語ごとの意味は理解できる。

「ネットは網で、ゲームは遊びだから、網で遊ぶって事は、つまりは虫取りだな！」

俺は導いた答えを自信ありげに突きつける。意外にも早崎はアウトドア派だったのか。更には子供心まで持ち合わせた。

早崎は少しむっとしたように眉を寄せ、

「アホ。バカ。アホ。腐れ」

「ちよつとボケただけなのに酷い言われようだな」

「……そうだったんだ。ごめん」

急にしおらしくなり早崎は頭を下げる。こつも素直に謝られると俺の方が悪く思えてくる。

「いや、俺も下手なボケだった。すまん」

「私も、リアルでそういう会話したことないから……こんな程度の低いボケをする人がいるなんて知らなかった」

「俺をそんなに貶したいのか」

それより、さっきから聞く“リアル”ってなんだろう。それよ

りも俺は部屋に上がり込んでからずっとしたいことがあった。
一人暮らしの同級生の部屋で、俺は体がか疼いてならない。俺は
早崎に真剣な眼差しを向け、言った。

「この部屋を片付けさせてくれ」

第二話『ネットゲームって、なんですか？』

俺の両親は共働きで、朝から夕方まで家には居ない。そのため、小学生にあがると必然的に鍵っ子となり、学校から帰ったら家で留守番をしていることがほとんどだった。

妹は保育園に通っていて、仕事を終えた母さんが迎えに行くから、妹が小学生になるまでは一人で過ごしていた。

寂しくなかったといえば嘘になる。その寂しさを誤魔化すためか、或いはこのままだと家はゴミ屋敷と揶揄される未来を子供ながらに危惧したのか、俺は自然と帰宅したら家事をこなすようになった。

一戸建ての我が家は外観は清潔感溢れる白を基調としているが、一步玄関ドアを開けばゴミ袋が迎えてくれる不潔な空間だった。居間には脱ぎ散らかした衣服、キッチンには食べカスがごびり付いたまま放置された食器、掃除も休日にしかないたため棚を一撫ですれば小うるさい姑も言葉を失うであろうくらいに埃が溜まっている。

つまりは両親共々、生活能力が著しく低かった。食事にしても俺が作らなかつたら添加物まみれの不健康な食生活になっていたと思う。

とまあ、そんなわけで俺は幼くして家事を担うようになった。嫌ではなかった。

家の中が見違えるほど綺麗になるのは快感でもあったし、料理も上達していくのが楽しかった。何よりは両親に褒められたのが嬉しくて俺は帰宅後は主婦業をこなすのが当たり前になった。

こういうことをしてたから同級生との話題も合わなくて、次第に距離感が生まれていったんだよな。おやつ時のワイドショーの話なんて小学生が食いつくわけがない。

今となつては俺はそこいらの新米主婦は目じゃないくらいに家事は上手いと自負するまでになった。

そんな生活をしてきたせいだろう。

俺は酷く汚ない部屋を見ると綺麗にすたくなってしまつようになつていたらしい。いや、こんな惨状を目の当たりにしたら誰しもがそうなるか。

「早崎、ゴミ袋はどこだ？」

「多分、その辺だと思う」

と、パソコンに向かったまま早崎は衣服が積まれた山を指さす。

俺はその山を崩しに掛かる。スウェットにジャージと、恐らくは部屋ではほぼこれで過ごしているのだろうと思われる衣服をかき分けていくと、少し手触りが違ふのが……

「……………」

思わず摘んで目の前まで掲げて眺めてしまふそれは、まぎれもなく女性が年頃になると胸に身に着けるアレである。近年は男も着ける人もいるとテレビで観たことがあるが、男の胸には紛い物じゃない限りブカブカになるであらう大きさだ。

「……新堂かなめは変態だった」

ビクンと背筋を張り、ゆっくりと振り向くとノートにペンを走らせる早崎が。

「何を書いてるんですか、早崎さん」

「変態が生まれた瞬間を。事細かに」

冷静に早崎は言う。校内でもポーカーフェイスを貫いてるが、自分の下着を見られてもそれは変わりない。

「いや、違う！ 誤解だ！ それをよこせ！」

俺は必死に否定して、膝で早崎ににじりよる。

「寄るな変態」

冷たく言い放ちながら早崎は俺の顔面を足蹴にして突き放す。

俺はとりあえず正座する。右手にブラをまだ握っているのに気付き、衣服の山に放った。

「まあ、ついまじまじと見てしまったのは謝る。だが、その辺に置いてくのもどうかと思うぞ」

「変態は見苦しい言い訳をした」

「すまん。俺が全面的に悪かった！ だから書くのはやめてくれ！」俺は畳に頭を打ち付けて何度も土下座する。

「そう」

パタンとノートを閉じる音が聞こえ、俺は顔を上げる。

「新堂かなめは、これを公開されると困るのか？」

ノートを指して早崎は聞く。

俺の半ば冤罪的な行為が記されたであろうノートがもし公開されたら――

「……いや、あまり困らないか」

「どうして？」

「自慢じゃないが俺はそこまで学校じゃ全く目立つてもないし好感があるとも思っていないしな。そのくらいの汚点は大したことはないそれにノートに書かれたのくらいじゃ噂話程度までしか広まらないだろうし」

「ツマンない」

ガツカリした風でもなく早崎はノートを放り投げる。そしてパソコンに向き直り黙ってしまう。

クラスじゃ少し変わった奴だと思っていたが、それ以上に変な奴かもしれない。

だが不思議と、もう関わらないほうがいいとは考えなかった。それどころかまだ放したいという気持ちまである。人付き合いが希薄な者同士だからだろうか。

俺はそんな考えにいたった自分に苦笑して首を傾げ、掃除の続きに取りかかった。

「ふう」

俺は大して流れてもいない額の汗を拭う真似をし、満足げに部屋を眺める。

一時間前の写真撮っただけでビフォーアフターを比べてみたいにくらいに部屋は見違えた。

雑多な物に埋もれていた畳全体が姿を表し、食器が片付けられたシンクは輝きを取り戻した。トイレ掃除もしたし、これで誰に見せても恥ずかしくない部屋になったな。

まあ、俺が勝手にしたことであるから感謝を要求することはないが、部屋の主には少しでもこの状態を維持するよう努めてもらいたい。

部屋の主は俺が黙々と片付けてる間、黙々とパソコンに向かっていて、今も精巧な日本人形のように繊細な黒髪に覆われた後ろ姿に動きはない。

というか、一つ疑問がある。それは俺が何の関わりがない早崎の家に来た理由の一つでもあり、先程からおかしいとは思っていた。

「ところで早崎、風邪の方は大丈夫なのか？」

綺麗というより不健康という印象を与える白い肌色は元々だし、それ以外の様子は病欠するとは思えないほど問題なさげに見えた。今日で三日連続休んでるからだいぶ酷いとも想像していたが。

布団も押し入れにしまわれていたし、俺な中に一つの仮説が生まれてた。

「……風邪？」

振り返ると早崎は何のことかというように怪訝そうに眉を寄せる。

「風邪で休んだと聞いたからプリントを持ってきたんだが」

「ああ」

早崎はたった今思い出したかのような薄い反応を見せ、

「ケホケホ。頭が頭痛で痛いし、鼻水も止まらないし、もう死ぬかも。葬式は家族以外誰も来ないと思う。私の灰は海に流してほしい」

「いや、どう見ても仮病だろ。鼻水流してないし！ 少しはそれっ

ばくしろよ！　というかどんなネガティブ思考だよ」

「……バレたか」

探偵物の的外れな答えしかださないへっばこ刑事でも分かる嘘でバレルも何も。

「何で仮病なんか使ってたんだよ」

クラスじゃ孤立気味だとはいえ、授業は真面目に受けている早崎が仮病を使って休む不良少女だったとは意外な事実だ。今までの休みもそれだったのか？

いや、もしかしたらそうせざるを得なかった並々ならぬ事情があるかもしれない。

「アシュラナイトを狩ってた」

俺には早崎が何を言っているのか分からない。飼ってたにしても買ったにしてもその前の言葉が意味不明だ。

「やつと装備可能レベルに達したから、鬼神の剛剣を手に入れたくて。アシュラナイトはベリオスの墓にしかないし、沸きも一時間に一回でドロップ率も低いけど、今朝ようやくゲットできた。羨ましいか？」

ますます意味が分からない。

自慢げに豊満な胸を逸らされても、俺の頭は疑問符だらけでちんぷんかんぷんだ。頭痛がするのは俺の方だ。

「悪い。俺には早崎が何を言ってるのか分からない」

「分からない？　外国に軟禁でもされてたの？」

「日本語がじゃねーよ、外国にも行ったことがないし軟禁もされていない。分かり易く説明してほしい」

「面倒臭いけど……掃除してくれた礼に説明してあげる」

気にしてない様子だったし、迷惑かとも思われてんじゃないという不安もあったが感謝してくれてたのか。

「ああ、頼む」

「で、何が分からないの？　アシュラナイトの沸き場所？　鬼神の剛剣のステータス？」

「全部だ」

「……全部」

早崎は呟き、心底面倒臭そうに僅かに顔をしかめて髪の毛を手でクシャクシャとかき乱す。

「新堂かなめ。MMORPGは知っているか？」

「えむえむおーあーるピーじい？」

早崎は深いため息を吐く。

「知らないか」

駄目な生徒認定された気分になった。

「バカにするな。RPGはロールプレイングゲームの略称だろ？」

「そんなことは常識。ゲームやったことある？」

「オセロなら得意だぞ」

「……テールゲームじゃなくて、家庭用ゲームとかのことに決まっている。まさかまた程度の低いボケだったのか？」

冷たい瞳を向ける早崎の疑問は流して、

「家庭用ゲームというと、ファ。コンとかだろ？ 一度もやったことないな」

「その伏せ方だと父親大好きな人みたい」

早崎は訳分らないことを言ったが、ここも流しとくべきだろう。

「新堂かなめ……本当に高二なのか？」

怪訝そうに早崎は半眼になる。

「紛れもなく高二だが？ 何故んなことを聞くんだ？」

「ファ。コンを例に出したから。普通の高校生ならプレ。テ、せい。ぜいスー。アミを思い浮かべるはず」

「俺のゲームの知識はそのくらいしかないんだが……おかしいのか？」

「別にいいんじゃない。とりあえずゲームは全くやったことない、でいいの？」

「まあ、そうなるな」

早崎は会話のキャッチボールを一旦止める。俯き加減でどこから

説明すべきかと思案しているような間を置いて、

「新堂かなめは、ネットゲームすら知らないってことか」

どこか小馬鹿にされてるようなニュアンスが含まれている気がするが、早崎の表情からは読み取れない。

「ああ。あと、呼び捨てなのは構わないが一々フルネームで言うのはやめてくれ。名前か名字どちらかにしてくれ」

俺が言うと、早崎はパツチリしてるとは言い難い目を見開いて、顔を逸らした。

「……人の名前を呼ぶのは慣れてないと言ったのに」

「だけど、呼びにくくないか？」

早崎はチラリと俺に顔を向ける。

「別に。……けど、そうした方がいいならそうする」

「じゃあ、そうしてくれ」

「うん」

と、早崎は姿勢を整え膝に手を突いて俺を真正面に見据える。まるでこれから重大なカミングアウトをするかのような緊張感が速見から伝わり、俺もつい固唾を飲んでしまう。一瞬、ここまでの会話の流れを忘れそうになっていた。早崎が口を開くまでの数秒間が数十秒にも感じたその雰囲気のせいだろう。

「……かなめ。……で、いいか？」

小さな声だった。それから確認するように聞いて早崎はそっぽを向いた。

「ああ」

俺は言いながらも軽く感動を覚えていた。実の所、異性から名字ですら呼び捨てされたことはなかったのに、（妹を除いて）それを通り越して名前で呼ばれるとは予想外だった。

「……で、早崎。話の続き——」

「伊織」

続きを促そうとしたところ早崎は遮ってそう言った。

「そう呼んで」

無機質とも思える黒い瞳を向け淡々と速見は言う。呼んでもいい、ではなく望むような言い方。

「いや……そんないきなり……」

俺は戸惑った。呼び捨てにされるのは初めてであるし、当然異性を呼び捨てにした経験は皆無だ（妹を除く）。早崎はどう思ってるのかは解るはずもないが、この数時間でそこまで距離感は縮まってるはないだろうし、下の名前を呼び捨てにされるのは普通は嫌なものじゃないのか？

「私だけ呼ぶのは不公平だし。かなめもそう呼んで」

「じゃあ。……伊織」

なんか淒く気恥ずかしい。陳腐な青春ラブストーリードラマの主演になった気分だが、照れてるのはどうやら俺だけらしい。

「それでいい」

伊織は満足げに頷いていた。

伊織はやはりちょっと変わっているが、それでも俺は距離が縮まった気がして嬉しくもあった。

第三話『MMORPGって、なんですか?』

「で、早……伊織……さん。ネットゲームってなんでしょう?」

初めての経験(クラスメイトの異性を名前呼び)での緊張でつかしこまった態度になってしまった。

「“さん”はいらない」

「悪い。じゃ改めて聞くが伊織、ネットゲームってなんだ?」

「インターネットを介して多人数でプレイできるゲーム。正確にはオンラインゲームと呼ぶみたいだけど。略す時はネトゲが一般的だと思う」

抑揚のない声で伊織は説明的に言った。

どこの世界の一般だよそれは。もしくは俺が外れているのか?

「えっと、つまりは……どういうことだ?」

「かなめは本当にバカ」

早崎伊織は口が悪い。というのは俺が今日初めて知った情報だが、ネット……オンラインゲームに関しては全然理解できてないし、反論できない。『バカと言ったほうがバカなんだ』と返したところで子供じみた言い争いにすらならないだろう伊織の場合は。

伊織はいかにも面倒だけど仕方ないという類の嘆息を吐き、

「じゃ、チャットは知ってる?」

「アレだろ? ネット上で会話しあうっていう。聞いたことはある」
唯一の友人からな。割と多趣味な奴で以前にチャットで寝不足だぜ、と欠伸をしながら愚痴られたことがある。

「そう。オンラインゲームはそれのゲーム版みたいな感じ。ネット上の人とリアルタイムで同じゲームをする」

「ええと、その相手は知り合いなのか?」「リアルなの? 中にはそういう人もいると思うけど、基本的には知らない人」

「……ネットでそんなことができたなんて初耳だな」

「パソコンあるの?」

「一応な。親父から貰ったノートパソコンが部屋に。あまり使っていないが」

家事を任せきりだからとお詫びとご褒美と誕生日と入学祝いを込めて去年貰ったが、元々そんなに興味はなかったから閉じている時間の方が長い。最新型ではあるらしいが俺には何が新しいのかは分からない。

「それならオンラインゲームは普通知っているものだと思うけど」

「別に欲しくて貰ったわけじゃないし、あまり使っていないからな」

「あまり……エロサイト巡りとか？」

「なっ!？」

少し考えてから伊織はとんでもない憶測を放った。突飛な思考過ぎるだろ。

「違う？」

「……まあ、その話はいいいじゃないか」

全面的には否定できないから俺は話を逸らした。

「男は皆そうだと仲間がいつてたけど、かなめもそうなのか」

「その話はいいつて言いましたが!？」

「……そう」

と、伊織は口元を緩ませた。薄笑いといえはいいのか。言わなくとも分かっているという生温かい優しさが垣間見える表情だ。初めて見た伊織の笑顔が俺のネット事情を察せられてとは何とも言い難い気持ちになる。

「話戻すけど」

逸れたのは貴女が原因だと思えますが。

「そのオンラインゲームの中でもっとも賑わっているのがMMORPG」

出た。意味分らない言葉その二が。

「えむえむおー……えむ、えむ、おー! エイエイオー! ……あ、なんて……すみません」

伊織が絶対零度の瞳だったから、俺は空気を読んで謝った。自分

でもスベる予感してたから傷つきはしないさ。

「MMORPGはマッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲームのこと」

単語を並べられたところで俺には何も伝わりはしないぞ。これを訳していけば分かるのか？

「多人数参加型オンラインRPGっていったほうが分かり易いけど」「いや、それでも今一ピンとは来てないが」

俺がゲームもネットの知識も乏しいのはさて置いて、伊織の説明は飛ばしすぎてる気がする。

織田信長？ 誰、スケートの選手？ と首を傾げるような人に対して本能寺の変というのは明智光秀が——と説明するような。まあ、戦国時代を学ぶに欠かしてはならない人物を知らない奴はいないだろうが。

「多分、実際に見たほうが早いと思う。かなめに教えるには馬鹿でも分かるMMORPG入門が必要そうだし」

「そんな本があるのか」

今度見に行ってみるか。

「……皮肉」

ボソリと言つて、伊織はパソコンに向かう。俺は気になりハイハイするように伊織ににじり寄り、画面をのぞき込もうとして、

「私の後ろに立つな。あっち行つて、後で呼ぶから」

伊織に振り返らず名うてのスナイパーのようなことを言われ、俺はバックして部屋の中央で正座して待つことにした。

片付けて改めて見回すと殺風景な部屋だなと感じた。高校生の女子の部屋を見たことはないが、さすがに伊織は極端な例だろう。

まるで歌詞のように、部屋にはテレビもなく、ラジオもない。あるのはゴミ箱と台にすら置かれてない電話。ハンガーも足りてなく、畳んだ衣服は重ねて邪魔にならない位置に積んどいた。

今度、百円ショップで適当に整理整頓に便利な品でも買ってきてやろう。ちなみに制服は壁に掛けてある。

先程まで絨毯代わりかと思えるくらいに床に敷かれていた雑誌類も、俺がイメージする一般的女子像とは違った。女子のカリスマとも呼ばれるようなモデルが表紙ではなく、これが俗にいうオタクが萌えなどと言ってしまうのだろう、髪の色がおかしいアニメキャラのイラストが表紙を飾っていた。

この見えそうで見えないキワドいポーズが——いや、そんな描写はどうでもよく、伊織に聞いたところPCゲームの情報誌だそうだが雑誌の他に部屋にある娯楽と呼べるものは、伊織が現在向かっているデスクトップパソコンだ。

モニターとキーボードが机の上に置かれ、他に物の置き場がないくらいにスペースを占領していることから、待遇の違いが窺える。一人暮らしを選んでまで伊織がしたかった『オンラインゲーム』をプレイするために必要だったからだろう。

だが、俺としては食事は机の上に並べて行儀よく食べてほしいが「かなめ」

伊織が今までよく生活できてたと呆れていると、伊織に呼ばれて振り向いた。

「これ」

と、伊織は少し横にズレてパソコンの画面を見るように促す。俺は画面に近寄った。

「……なんだコレは」

画面に映り出されている光景に愕然とした。ヨーロッパ辺りの街並みを彷彿させるような恐らくは石造りの建物が、こちらを向いて立つ人間の背後に見下ろすように建ち並んでいる。さすがに実写とは思わないが、これがゲームとは……背後にある噴水の水しぶきもリアルだし。

「驚きすぎ」

「これがMMOというやつなのか？」

「そう」

「凄い綺麗だな」

「普通だと思うけど。スペックもそんなに必要じゃないし」

「そうなのか？」

最近のゲームはここまでリアルな映像になっていたとはただただ驚くほかない。空の雲も本物の空と同じように流れているし、画面に映る人間も八頭身のスタイルのいい美女だ。

「PS2くらいのグラフィックでそうなら、最新機のは涙流すかも」

「PS2……一応は聞いたことがある気がするが、最新機なんてのが出てるのか？」

俺が首を傾げると、伊織は呆れ果てたように首を振る。長い髪が動きに合わせて揺れて顔に掛かる。伊織は髪を顔の横に払いながら、
「それは、アホでも分かるゲーム入門でも読めばいいと思う。今は関係ないし」

「そんな本があるのか」

「……………今居るところはセントラルだけど……一応、一番人が集まる街。で、突っ立っているのが私のキャラ」

「伊織には似てないが」

画面に映るキャラはセミロングの茶髪で顔も伊織とは全く似てない。

「さつき適当に作ったばかりだから。顔グラとかは初期のまま。名前も適当だし」

「頭の上のこれか？」

キャラの頭上には青い文字で『ああああいう』とある。こんな名前を付けられたら俺は親の愛情に恵まれなかったと嘆き家出。そして改名する。

「“ああああああ”にするつもりだったけど使われてたから無理だった」

「いや、ちゃんと名付けてやれよ」

幾ら適当でも、『あい』とか、打つにしても楽でそれらしい名前は付けれるだろうに。

「これだけだと無知のかなめには一見普通のRPGにしか見えない

と思うけど」

「……普通のRPGというのが分からないんだが」

「さつきから、ああああいうの近くを通るキャラ見てると思うけど、何だか分かる？」

暇を持て余したのか背伸びをしたりしているああああいうの前を通り過ぎたり、後ろを通り過ぎるキャラが先程から目に付く。質素な服装のああああいうとは違い、奇抜な服装のキャラだ。

「この、ああああいうが伊織のキャラなんだろ？　だったらゲームの中にいるキャラなんじゃないのか？」

「NPCのこと？　確かにゲーム内にいるけど、この人達は違う」

「じゃあ何なんだ？」

「プレイヤー。ああああああいうと同じ」

俺は画面に映ったキャラを指さし、

「というと、こいつも伊織のキャラなのか？」

「違う。同じゲームをしている他人。例えば、かなめが今の時間自分の部屋でこのゲームをプレイしていたとしてこの場所に来ていたら、ああああいうがいる」

頭がこんがらがって来たが何となくは理解が追い付いてきたぞ。

「つまりは動き回ってるキャラは、今どこかでこのゲームをプレイしているということか？」

「うん。ネット上に構築された一つの世界に集まってる。そんな感じ」

そう言われるとたかがゲームなのに随分と壮大な気がしてくるな。

「じゃ、この世界の人口は何人くらい居るんだ？」

画面内には朝の駅前を彷彿とさせるくらいにひっきりなしにキャラが通り過ぎる。これまた朝の通勤ラッシュのように皆一様にせわしなく走り、突っ立ち続けた挙げ句に座りだしたああああいうが浮いている。

「十万人は越えたと公式で発表されていたけど。三ヶ月くらい前だし正確には分からない」

「じゅうまん……」

この街の人口と同程度だと。

「中には五千人越えてるのもあるけど。全世界で」

「ごせんまん……」

全世界の五千万が同じゲームをしてるなんて想像できん。

「十万と五千万だと今やってるゲームが途端に少なく感じるな」

「これは日本限定だから多い方」

「そうなのか。十万人が集まって同じゲームをしているなんて凄い時代だな」

「あくまでも登録数だし、プレイする時間帯やサーバーも分けられるから実際に十万人も集まることはないけど」

「多人数参加型の意味は大体理解できてきたが、まだ分からないこともある。」

「このゲームで何をするんだ？　さらわれた姫でも助けに行くのか？」

「色々。レベル上げたりしてキャラを育てていくのが基本だと思うけど、他にも生産作業を専門にしたり、レアアイテム入手に励んだり、プレイスタイルは人それぞれ」

「俺のネタは見事にスルーされた。知っている数少ないゲームネタなのに。」

「奥が深いってことか」

「そう。一つでも拘ると時間掛かるから中々辞めどきが難しい」

「……もしかして、休んでる間はずっとやってたのか？」

「安心して。ご飯はちゃんと食べてる」

「それはよかった——じゃねえよ。いや、大事だけど。少しは悪びれる表情してくれ……」

無表情で何故と小首を傾げる伊織に、呆れを通り越して感心してしまう。伊織にとってゲームは学校より優先することなのか。

「そんなに面白いのか？　これ」

ゲーム画面を見ると、伊織のキャラは座ったままゆっくりと頭を

垂れて船を漕ぎ、寝息を立てていた。

「興味あるの？」

伊織の表情が微妙な変化を見せた。僅かばかりだが光が射したような。

はつきり言って興味はなかった。単に深い考えもないパツと口から出た疑問だったし。

だが、ないと答えるのは躊躇われた。

伊織の表情にしてもそうだが、共通の話題が出来たら伊織と仲良くなれるかと思った。

教室でいつも一人の伊織を見かねた……のも少しはある。友達のいない寂しさは俺は分かるし、伊織も同じ気持ちはあるだろう。俺の憶測でしかないが。

「ある」

俺はキツカケになればと、強い意志を込めてそう言った。

第四話『ネットゲーム、買いました』

「六千八百円か……」

場所は駅前の家電量販店。そのパソコンコーナーでうなだれる俺。

事前に伊織に聞いていたとはいえ、実際に値段を見ると高いと感じてしまう。人生の半分を主婦業に費やしてきたせいかな金にシビアになってるのもあるかもしれない。

『CROSS・FANTASIA』

剣を構えた青年と弓矢で狙いを付ける少女が描かれたパッケージに印字されたタイトルと、メモに記しておいたタイトルを見比べ目当ての品に間違いがないことを確認。

パッケージを手にとって次に、あれば便利と言われたコントローラーを探しに向かう。

軽い気持ちで興味があると言ってしまったが、オンラインゲームというのは随分と金がかかる娯楽だ。

『長期的に見たらコストパフォーマンスはいい方』

とは伊織談。

果たして俺が長期的に楽しめるだろうか……そんな不安を息にしながら周辺機器売場に着いた。

昨日のことだ。

伊織に呼び出された俺は再び『くずれ荘』へと訪れた。今回は「名は体を表す」と一言呟いて敵かに頷いてから敷地へと踏み入った。余談だが俺は少しばかりドキドキしていた。呼び出された経緯が

アレだと、たとえこないだのネトゲの話の続きだと分かっている、男としては宝くじで億万長者になるくらいの微かな期待をしよう。

初めて伊織の部屋に訪れた次の日。伊織はきちんと登校してきた。俺の挨拶を『馴れ馴れしい』とばかりに無視して、窓際の席に着いて文庫サイズの本に目を落とすのはいつもの姿だ。

孤独な文学少女というイメージで見ていたが、後に読んでいたのはネトゲの攻略本だと知った。

仮病とはいえ三日も休んだ伊織に誰も心配の一声もかけないのを見て、俺は哀しい気持ちになったのを思い出す。

そして伊織は学校を授業を受ける場ではないと言わんばかりに、帰りのホームルームが終わった後一番に教室を出ていく。

俺は話しかける機会を窺っていたのだが、声を掛けても顔を挙げはくれなかった。無視なのか、本に集中していたからかは分からないが、結局会話を交わさないまま俺も帰ろうとして下駄箱を開けると一枚の紙を見つけた。

ノートのページをちぎって四つ折りにされたそれを素早く制服のポケットにしまい込むと、何食わぬ顔で帰路に着く。

生徒の姿がまばらになったのを確認してから俺は紙を開いた。それには意外と上手い手書きの字でこう書かれていた。

『明日、部屋に来い』

一瞬果たし状かと思った。命令形だし。その文字の下には早崎伊織とあった。

幾ら携帯電話を持ってないとはいえ、他に方法はなかったのだろうか。

隣の席なのだから、授業中にちよいと紙切れを渡してくれるとか出来ただろうに。恥ずかしかったとか？

顔を赤らめる伊織を想像しようとしたが、上手くできないまま俺は二〇四号室のドアをノックした。

「オンラインゲームには二種類ある」

一昨日と変わらずジャージ姿の伊織は言った。ちなみに、何故遠回しな呼び出し方をしたか聞いたが『別に』と答えにもなっていない素っ気ない言葉が返ってきた。

「二種類？」

俺が伊織のプレイしているMMORPGの始め方を訊ねたら、こう返してきた。

「無料と有料」

「タダでできるのか？」

俺はセコい性格ではないが無料という言葉にはつい反応してしまう。

「一応はね」

伊織はやや不機嫌そうな口調になり、

「けど、結局は金を払わないと不利なシステムのゲームが多いから、入れ込むなら実質は最初から有料のより高くつくのも多い」

「そうなのか。上手い話はないってことか」

「うん。無料でもやれないことはなかったけど、効率はかなり悪かった」

伊織の経験談らしい。

「で、伊織のやってるのはどっちなんだ？」

「有料」

「幾らだ？」

金が掛かるのは予想の範囲ではあるが、実際にどれくらいなのかは予測していない。調べればいいのだが、伊織に聞けばいいかと思いつかなかった。

「月額は五百円だけど」

「へ？ 月額？」

予想外の言葉に俺は目を丸くすると、伊織は冷めた口調で、

「有料と言ったけど。かなめは数秒で忘れる猿以下の頭なのか？」

「いや、ゲームだからってつきりソフトを店で買ったりするもんかと。」

その金額が有料ということなるかと考えたんだが」

伊織は点けっぱなしのパソコンを一瞥し、

「ソフトはダウンロードするのが多いけど、このCROSS・FANTASIAはソフトを買ってインストールするタイプ。ダウンロードの場合は月額料金しか掛からないけど、買う場合はもちろんソフト代が掛かる」

「随分と高くつくな」

「初期投資はそうだけど、月額料金は安い方。他のMMOだと千円台が一般的」

伊織の感覚だと安く思えるのかもしれないが、俺からしたらソフトを買った後も金が掛かるというだけで高い気がするんだが。まあ、小遣いを圧迫する額ではないしな。元々余るくらいだし。

「で、そのソフトはどこに売ってるんだ？」

「ただいまー」

取り立てて特徴の平凡な一戸建てである新堂家に帰宅し、突然の来客や宅配便も恥ずかしくない掃除が行き届いた廊下を通り、リビングに入る。ここを通らないと二階の自室には行けない造りになっている。

「おかえり。かなめ」

「ただいま」

ソファーに寝転がりながら迎えてくれたのは新堂ひより。俺の妹だ。サバサバした性格で言動や行動に女らしさはほとんど感じられない。せめて一度くらいは『お兄ちゃん』と呼んでほしい願望がある。

喉を潤すかと、買ってきた品が入った袋を置く音にピクリと反応し、ひよりはデニムのショートパンツからすらりと伸びる引き締まった健康的な両脚を高く上げ、反動を付けて体を起こした。

ずっと寝転がり続けてたのを物語る、寝癖になったショートヘアを気に止めることなく、袋に視線を向け、

「何買ってきたの？ 食べ物？」

買った物をしてきたと分かると、ひよりはいつもこんな感じに聞いてくる。成長期も関係なく昔から食欲旺盛で、買ってきたお菓子は大抵ひよりの胃の中に消える。まあ、買ってこないとうるさいから普段はなるべく安いのは買うようにしているが、今日はスーパーには寄ってない。

「ちげえよ」

一言で伝え、冷蔵庫から麦茶を取り出して水分補給。

ひよりがそんだけ食っても太らないのは部活でエネルギーを消費してるからか、体質か。そのカロリーを少しは胸に回した方がいいんじゃないかと心配になる。今もＴシャツの胸の辺りはまっ平らだ。伊織が中二の時はどうだったんだろうか。まあ、どちらもさしたる興味はないし、言って痛い目には合いたくない。伊織からは冷たい視線、ひよりからはもれなくハイキックが飛んでくるだろうし。

「何コレ！？」

と、袋からパッケージとコントローラーの箱を取り出していたひよりが叫ぶ。

「ゲームとコントローラーだが……ぐっ！」

「かなめ！ いったい誰に苛められてるの？ 言いなさい！」

しいて挙げるなら今俺の胸ぐらを掴んでいるお前だ。

「……どうして……そんな……飛躍した……考えになるんだ……」

首が締め息苦しい中声を絞り出すと、ひよりはパツと手を離れた。俺は首を手で押さえながらせき込んだ。あと数秒遅かったら危なかった。

「だって、かなめ、今まで全くゲームに興味なんか示さなかったのに、いきなり買ってくるなんて有り得ないし。だとしたら答えはクラスのいじめっ子に買うように脅されたしかない！」

自信満々に俺に指を突きつけるひより。俺はパシられるキャラに

見えてるんだろうか。少なくともクラスにジャイ。ンのような存在はいない。……俺が見える範囲では。

「んなわけあるか。自分の意志で買ったんだよ。というか思考が突飛過ぎるだろ」

「けど、家にゲーム機なんかいないのに買ってくるのか。少なくとも何か事情を勘ぐるのが普通じゃん」

「ゲーム機は必要ない。パソコンでできるやつだし」

ひよりはソフトのパッケージを手に取り、裏面を確認する。

「ホントだ……って！ これオンラインゲームじゃん」

「なんだ。知ってるのか」

ひよりもゲームには詳しくないと思ってたから意外な反応だ。知らなかったなら先日得た知識を振りかざすつもりだったのに。

「かなめが知ってる方が意外なんだけど。それもオンラインゲームだなんてさ、どういう風の振り回し？」

ジト目で怪訝そうに見てくるのはいいが、

「風の吹き回し、な」

俺が間違いを訂正するとひよりの頬が赤く染まる。

「ちよつと勘違いしてただけなんだからっ！」

「はいはい」

必死に言い繕うひよりをなだめる。

「そ、それより、オンラインゲーム。なんで始めようなんて思ったわけ？ コントローラーまで買っちゃって」

「友達から話を聞いてな。やってみようかと思ったんだ。というかなんでオンラインゲームなんて知ってたんだ」

勝手に友達としてしまったが、もうなってるといってもいいだろう。二回も部屋に行ってたんだし。

「友達の家でゲームの雑誌読んだことあったし」

「そうなのか」

「かなめは最近のゲーム知らないだろうけど凄いだから。野球なんてめっちゃリアルで、オンラインで対戦までできるんだから」

興奮気味にひよりは語った。

そう言われると俺が時代遅れの人間みたいだが、事実だから致し方ない。これから先端に立つがな。フフフ……。CROSS・FANTASIAは一年前に販売されたらしいし。

「実況でも付いてるのか？」

ひよりは呆れたように、

「そんなのつくにあるってば。今のなんて選手は本物に近いし、野球中継を観てる感覚なんだから。ダルビッシュや田中の雄叫びまで再現されてたし」

興奮する部分が多少ズレてるような気がするが、最近のゲームの進化は伝わってくる。

「ところで、オンラインで対戦っていうと、自宅で居ながらにして全国の人とできるのでいいんだよね？　RPGじゃなくてもあるんだな」

「当たり前でしょ。今じゃオンライン対応は普通のことみたいだし。てゆうかなめ、そんなことも知らなかったの？」

妹よ無知の兄を蔑むように座った瞳を向けるな。人間誰しも最初は無知だ。お前だってサッカーのオフサイドのルールをよく理解してないじゃないか。

「まあな、知ったのは最近の話だし」

「そなんだ。けど、ホントさ唐突過ぎじゃない？　かなめがゲームをするなんて、余程しつこく誘われたとか？」

ひよりは俺の顔を興味深げに窺ってくる。

「そうじゃない。俺が話を聞いてやってみたいと思っただけだ」

「へえ」

ニヤケ顔で言いながらひよりは俺の周りをクルクルと歩き、一周して間近に顔を近づけてくる。しばし大きい瞳で見つめ、その目もニヤリと孤を形作ると、顔を放しズバリと指を突きつけた。

「その友達って女？」

「そうだが。ただの友達だ」

ここで下手に否定したり慌てたりすると、余計な誤解を与えかねないし淡々と答えてやった。

「そなんだ。けど、かなめに友達が出来るなんて凄いことじゃん」

「……まあな」

実はクラスの人気者なんだぜと強がりも無駄だろう。これまで俺の家に友達が来たことがあるのは一人だけだし。すぐバレる嘘だ。

「今日の夕食はあたしが作っとくから、かなめはゆっくり遊んでくれば。オンラインだしいいしょにやるんでしょ？」

ひよりはニコツと笑って言った。珍しい気遣いだが、俺は素直にその好意を受け取ることにした。ちなみにひよりの料理の腕は俺よりもあると認めざるを得ない。

俺は一言礼を述べて、早速始めるかと自室へ向かった。

第五話『ネットゲーム、始めました』

俺の自室はベッドに本棚、それと机くらいしか描写すべき点がない殺風景な部屋だ。

特に趣味らしい趣味というのがないから仕方ない。だが、伊織の部屋よりはまだ気を払っているといえる。

本棚は埃が被らないようにカーテンで仕切ってあるし、衣服だつて放り出さずにクローゼットに収納してある。特に掃除に関しては、いつ意地の悪い姑に『まあ、こんな所に埃が。掃除もできないのかしら』と嫌みを言われぬように窓の棧に至るまで行き届いている。

そんなことは今はどうでもよいことか。

俺は椅子に腰掛け机の上に置かれたノートパソコンの電源を入れる。

起動までの時間も無駄にはせず、大金をはたいて購入したゲームソフトを手にとってパッケージを開け中身を出す。教科書くらいの厚さの取り扱い説明書と、プラスチックのケースが入っていた。

まずはケースを包むビニールを取り……取り……やけにピッタリとひつついて……このっ……ようやく取れた。

ケースを開くとディスクが収納されており、それを左手で優しく取り出して、右手で起動し終えたノーパソのディスクドライブにセツトする。

するとウィンドウが開き、画面に映る手順通りに進めていくとインストールが開始された。

説明書に目を通さずにやるのはいささか不安があるが、伊織が『インストールには時間が掛かるから先にしてから説明書を見た方が効率的』と淡々としたアドバイスをくれたから信じるしかない。

俺はようやく1%になったインストール状況を横目で見て、説明書を持ってベッドに横になった。

俺は一息吐き、読み終えた説明書を閉じ、起きあがった。
操作説明とかはともかく、世界観の細かい説明は果たして必要なのかと疑問に思う。

ゲームをより楽しむのには役立つかもしれないが、実生活では無用の知識だし。

架空世界の歴史を覚えたところでテストには出ないしな。騎士国の初代団長の名前を知るよりはこっちの歴史的偉人の名前を一つでも覚えたほうが役には立つ。少なくとも赤点の確率は減る。

「アーカム・ナイトハルト」

苦笑し、初代騎士団長の名前を呟く。

その人物の功績も相関図入りで詳細に書かれていたから、思わず読みふけてしまった。アーカムは偉大な騎士だったんだな……と感慨に耽るくらいに。

これらの知識はゲーム内で追々説明していくとして、暗転していたノーパソを少しイジると、インストールは既に完了していた。ベツド脇の小さな棚の上に置かれた時計に目をやると六時を回っていた。集中しすぎていたようだ。

「かなめー！ ご飯！」

階下より威勢のいい声が聞こえてきたし、続きは後でとノーパソを閉じて俺は部屋を出た。

腹を満たして、再び部屋へと戻ると、説明書に書かれた通りにゲームをプレイにするにあたってのアカウントを取得した。

いわば、CROSS・FANTASIAの世界に行くためのパスワードみたいなものだ。登録時に発行されたユーザーIDとパスワードを忘れないようしっかりとメモに取った。

月額料金の支払いについてだがウェブマネーが使えると事前に伊織から聞いていたから、予めコンビニで買っておいたのを利用した。千円分チャージしたからこれで二ヶ月はプレイできる。

いかにも知ってましたという体で説明したが、俺はウェブマネー自体、耳慣れない言葉だった。

『料金支払いはクレジットカードかウェブマネーでできる』

『クレジットカードなんて持ってるわけないが、ウェブマネーってなんだ？』

『無知の極みを目指しているのか？ かなめは』

『……絶対常識的な知識じゃないだろ。それは』

『面倒臭いけど——』

こんな風に昨日伊織に教えてもらった。

簡潔に言々とオンライン上で使うお金みたいな感じだそうだ。いやはや技術の進歩には恐れ入る。俺はてつきり利用料金は指定された口座に振り込むとか、運営会社に払いに行くのかと思っていた。

これでプレイ前の下準備は完了し、あとは気兼ねなくゲームをすることが出来る。

初ゲーム購入、初ウェブマネー、初オンラインゲーム、なにかと初尽くしのここ数日だ。そして俺はこれから未体験の世界へと飛び出す。CROSS・FANTASIAの世界へ。

説明書にかかれていた世界観を想起し、脇に置いたパッケージの裏面に躍る『今日からキミもエタナリアの住人だ！』という安っぽいキャッチコピーを目にし僅かながらもテンションが上がる。

マウスを操作しトップ画面に表示されたCROSS・FANTASIAのアイコンをクリックする。

交差した剣の上に大きく表示された『CROSS・FANTASIA』のロゴが出た画面はコントローラーのボタンを押すと変わり、次に表れたのはIDとパスワードを入力する画面だ。

引き出しからメモを取りだし、それを見ながらギコチない手付き

でキーボードを叩き慎重に入力する。間違っていないか確認して決定をクリックする。

そして冒険が始まる——という高まる期待を裏切るように『キャラクタークリエイト』の画面に変わった。そういえば、説明書にもあったな。ちなみにキャラクターは三人まで作成可能だそうだ。

画面には男のキャラと女のキャラが並んでいて、性別を選択するみたいだ。当然俺は男を選んだ。

続いてフェイスメイキング画面になる。

平凡としか言い表しようがない男性キャラの顔のアップが画面の右半分であり、左半分には『髪』『目』などの顔の部分の名称が並び、それらを組み合わせで顔を作れるらしい。

まずは『髪』を選択すると男キャラの頭がアップになる。焦げ茶色の短髪だ。

『髪型』『カラー』『アクセサリ』と髪だけをとっても色々と変更できるらしい。まず髪型を変えようと選択すると……百種類以上あることを如実に示す数字が。

……キャラクター一人作るのにも骨が折れそうだ。

「……ふう」

椅子の背もたれにくたびれた体を預け、一仕事終えたサラリーマンがごとく一息吐いた。時計を見ると時刻は九時を回っていた。

画面に映るキャラクターは俺を数倍格好良くしたような顔をしている。見栄を張ってるわけじゃない、自慢じゃないが俺はクラスでは中の上くらいに位置する顔だとは思っている。

悩んだ末に自分に似せたが、各パーツの種類は多岐に渡り種類も豊富だった。これだけあればさながらモニタージュのようにどんな顔でも作れそうだ。

そして体型も自分に似せた。百六十四センチの五十四キロ。同年代と比べると小さめで、画面に映るキャラも頼りなさげな印象を受ける。

ちなみに背は二百五十から百。体重は百五十から二十まで自由に設定可能で、むろんそれに合わせて見た目は変化する。

試してはないが身長が二百五十で、体重二十も恐らくは可能だと思うが……それは果たして人類だろうか。あだ名は電柱かモヤシになる可能性が高い。

そんな奇妙な生物の想像をやめて、姿勢を正して再び画面に向き合う。

容姿を決定すると次いで出てきたのは『名前を入力してください』という文字。

「名前か」

自由に決めていいのだろう、ネーミングセンスには自信がないのは自覚しているし、拘らずに自分の名前でもいいかと入力をする。

「……『その名前は既に使用されています』？」

そう画面に表示され、俺の名前は認められず再入力を求められた。要——なんて名前はそうありふれているとは思えないが。俺の知る限りじゃ俳優の名字くらいしか見た覚えはない。

平仮名にしても同じ表示が出た。かなめは人気なのか。

どうするかと、腕を組んで悩んでいると、ドアが開き、

「かなめ。電話」

と、既にパジャマ姿のひよりがコードレスの受話器を手に部屋に入ってくる。

「俺にか？」

眉を寄せ俺は訊く。坂本からなら携帯があるし、他に思い当たる人物はいない。

「うん。女の人、例の友達じゃないの？」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、受話器を手渡すと、ひよりは欠伸をしながら部屋を出ていく。明日も朝練があるだろうし、これから寝る

のだろう。

思い当たった人物の無表情を脳裏に浮かべ、俺は受話器の通話ボタンを押して耳に当てた。

「もしもし」

『登録はもう済ませたの?』

そいつは名乗りもせずに唐突に言ってきたが、名乗らずとも抑揚のない声質は誰なのかを如実に証明しているようなものか。

「伊織、何で家の番号知ってんだよ」

『クラス名簿に載ってた』

ああ。生徒の名前が五十音順に載ってるペラペラな紙か。確か電話番号も掲載されてたはずだ。俺のは一応はしまってたはずだが、伊織の部屋にもあったとは意外だ。てっきりクシャクシャに丸めてとくにゴミと化していたものかと。

「で、登録だったか」

何なのかは言わずもがこのゲームだ。今日買いに行くことは伝えてあったし。

『そう。サーバーのこと言い忘れてた。したの?』

サーバー……サバ……鯖がゲームと関係があるのか?

味噌煮

にするのかとトボケたくもなったが口には出さず、

「いや。まだ終わってないんだが。今は名前入力のことだ」

『……サーバー選択はその次だから、さっさと入力して』

「けどな、既に使われてるみたいなんだが、どうしたらいいんだ」

『なんて名前にしたの?』

「かなめ。漢字と平仮名で入れたが駄目だった」

『オンラインゲームじゃよくある話』

「そうなのか?」

『漫画とかアニメの人気キャラの名前はすぐ使われるみたい』

「じゃあ、かなめって人気のキャラでもいるってことか?」

『知らない。……そんなに自分の名前を使いたいのか?』

「まあ、出来たら」

酷い名前で伊織に冷めた反応をされるよりはいいと思うし。

『名前が被ってる場合だと、適当な記号で挟んだりすれば使えることが多い。ダガーとか、ホシとか』

試しに入力して変換してみると、ダガー（†）ホシ（ ）と出る。これで挟めってか……

『けど、それを格好いいと勘違いした厨二が使ってることも多いから、良いイメージは持たれないこともある。ま、かなめは厨二ネームというわけでもないし大丈夫だとは思う』

中二ってそんなイメージがあるものなのか？

「……とにかくお勧めはしないってことか」

『うん』

「じゃ、伊織が考えてくれないか？ 俺はこういうのは苦手だし」

『面倒臭い』

即答か。

『カタカナは嫌なの？』

「どうせ駄目だろうし試しては——」

だが、まだ入力してないしキーボードを叩いてみる。カ・ナ・メ、と、決定。

「あ」

俺の漏らした言葉で察したか、受話器の向こうで呆れたようなため息が漏れる。

『……次の画面出た？』

「ああ。プレイするサーバーを選択するみたいだが。これの話なのか？」

画面には。

- ・ノースブルー
- ・サウスホワイト
- ・イーストブラック
- ・ウエストイエロー

とある。サーバー名は東西南北に大国が栄えるという世界観から

きているようだ。

『そう。同じサーバーじゃないといっしょにできないから。移籍チケット買えば変えられるけど』

「同じ世界が四つあるってことだな。パラレルワールド的な。違う世界のプレイヤーとは遊べないわけか」

『かなめにしては理解が早い。たまに違うサーバー同士の交流イベントはあったりはするけど』

感心されてるのか皮肉なのか。伊織に猿並の知能だと思われるのだろうか。

「……伊織はどのサーバーなんだ？」

『ウエストイエロー』

「どうでもいい質問だが、何故そこにしたんだ？」

俺は騎士団のある方角のノースブルーが一番で、次いで白、黒といった選択順位だったか。

『人が一番少ないから』

「そんな理由でかよ」

『その方が狩場の取り合いも少ないし、マナーの悪いプレイヤーも少ないみたいだから』

「分かった。イエローだな」

『ん。待ってるから』

そう告げて通話が切れた。

意外と時間掛かったし今日はそろそろ終わるつもりでいたんだが「じゃあない」

俺は九時半を示す時計を見てから、受話器を置いて、コントローラーを握りウエストイエローのサーバーを選択した。

『CROSS・FANTASIAの世界へようこそ！』

そんな明るいナレーションと共に、俺のネットゲームのある生活

が始まったのだった。

第六話『ネットゲーム、始めました』

短いCGムービーが流れ、それが終わると光に包まれ俺のキャラクター『カナメ』が画面上に表れた。

カナメが立つ場所に既視感があると思ったら、先日伊織の部屋で見ただけだと気付く。

遠くに広がるヨーロッパ調の景色をバックに噴水の前に立つカナメという構図はあああいうと同じだ。アレは急造で適当に作成したキャラだったらいいし、ここがスタート地点のようだ。

俺はコントローラーに視線を落とし、ボタンの配置を確認する。左側にあるのが移動に使う方向キーとカーソルを移動するスティックで、中央にはスタートボタンなどが幾つか並び、右側にはボタンが六つとこちらにもスティックがある。

様々なパソコンゲームに対応している汎用コントローラーだそう
だ。

ソフトに同梱されていた操作簡易表を見ながらコントローラーを
繰る。

動かした通りに俺のキャラが動き、画面はカナメを中央に捉えるように合わせて動く。スティックをグリグリと動かすとカナメを中心にしながらも視点が変わる。まるで幼い子が大人を見上げるようなローアングルも可能で、もし女キャラで短めスカートの場合中身が見えるのではないかと。大丈夫なのか？

そういえば、このゲームのパッケージには十五歳以上対象と書かれていた。こういうことも可能だからなのかもしれないな。

それにしても先日とは比にならない程に辺りを行き交う人が多い。カナメが現れた時のように光に包まれて出現する人もちらほらと見かける。

あの時は確か午後四時くらいだったし、学生はともかく社会人は一般的には仕事中の時間だ。今は午後九時半過ぎ。社会人が自宅で

くつろぐ時間帯だからログインする人も多いのだろう。

何気なく画面に映るキャラクターの頭上に表示された名前を見ていくと、外国人のような名前が多い。俺のように本名を付ける人は少数派みたいだ。

「あ……」

今、カナメの前を横切ったトゲトゲとした黒い鎧を纏う人の名前を見て俺はぼかんと口を開けた。

“十暗黒の霸王”

イタイ。何がどうイタイのかと聞かれたら上手く答えられないが、とにかくイタイと感じた。伊織が勧めなかった理由が分かった気がする。

ところで伊織は一对どこにいるんだ。

待っているとされたが、肝心の待ち合わせ場所は訊いていない。というより訊いたとしても、この世界は俺が都会に行くのと同様に右も左も分からないし『騎士の銅像の前』とか言われてもどこにあるのか知らなければ行くことはできない。

電話して聞いて見るかとコードレス電話にチラツと視線をやるが、番号を知らない。クラス名簿はどこやったか——と記憶を辿っていると、ゲーム画面の左下にあるフキダシのアイコンがチカチカと瞬いた。

マウスでポインタをアイコンに重ねてクリックする。

これはチャットで、ゲーム内での会話文はここに表示される。空白が目立つメッセージウィンドウには、一言こうあった。

ネピア：操作には馴れた？

緑の文字で表示されたそれに俺は首を傾げる。俺に話しかけてるのか？　ネピア——見覚えのない名前だ。

伊織かもしれないが、万が一一人違いだったら恥ずかしいし、俺は不慣れな動作でキーボードを叩き、

『誰ですか』

と決定すると、カナメの頭上にフキダシで出る。

メッセージウィンドウにも白文字で表示されている。

『囁チャで話したほうがいい。凄く目立ってる』

ネピアから再度チャットが。囁チャってなんですか？ と、打

とうとしてると、

『メッセージに表示されてる名前に合わせて右クリックして、“ささやき”を選ぶはできる。多分、囁チャって何と首を傾げていると思うから先に説明するけど、ささやきチャットの略称。指定した相手にしか見えない会話のこと』

言われた通りにすると、幾つかの項目が表れ“ささやき”もその中であつた。それを選んで再びタイプする。

『先読みした説明どうも。一応聞くけど、伊織だよな？』

『もし違つてたとして、簡単に名前を出すのはやめたほうがいい。

その人が伊織になりすます可能性も捨てきれないし、金を騙し取られるかもしれない』

まるで熟練した遊撃手のように素早い返球、もとい返信だ。本人と面と向かつて会話するより早いくらいだ。

『オレオレ詐欺みたいだな』

俺だよ俺と電話してきた誰かに祖母がうつかり「太郎かい？」などといった名前を言つてしまい、なりすまして騙すという手口はテレビで見たことがある。

『まあ、騙すならもつと金のある人を狙うと思う。念のため注意しとくけど、オンラインゲームで過度に個人情報バラすのは基本的には厳禁』

無機質な文字だけのやりとりなのに、脳内じゃ淡々とした伊織の声で再生されるのが不思議だ。

『今どこにいるんだ』

『噴水前』

コンマ何秒かという早さで返つてきた言葉を見て、噴水前へと戻

る。何人が動かずに立っているキャラがあり、その中から『ネピア』という名前を探し、すぐに見つけた。

目の前に立ち主観視点に切り替える。

サラサラと風になびく藍色のセミロング。目を隠すくらいの長めの前髪をシルバーの髪留めで額の辺りで止めている。大きめな目は瞼が半分閉じており、眠たげな印象を振りまいている。

確か120番にそんな目のパーツがあつたが、選ぶ奴がいたとは驚きだ。自身に似せたのかとも頭に過ぎつたが、カナメとさほど変わらない質素な服装の胸部はこれまた質素だ。

『全然かなめには似てないな。理想？』

ネピアは操作している人の内心をトレースしたかのように、唇の端をもたげて嘲笑する。画面の前に座る俺は苦笑を浮かべてるが、カナメの表情は変化しない。

『フェイスアクション機能。画面右の顔のアイコンを押せばできる』画面の右端にも携帯の絵文字を思わせる細かなアイコンが並んでいて、その中の顔のアイコン選択する。

すると『フェイスアクション』の画面が右半分に出る。怒り、笑顔、仏頂面、ウインク、など顔の表情が色々と選べるようだ。表情だけで言葉を交わすことなく意志疎通ができるであろうと思える数だ。その中からわざわざ嘲笑を選んだのか。

『ちなみに嘲笑はキーボードにショートカット登録してある』

そんな頻繁に使うとは思えないが。

『タイピング速いな』

俺は一々キーボードを確認しながら打ち込んでるからかなり遅い。格好つけてブラインドタッチなんかしたら、言葉にすらならないだろう。

『馴れれば自然と速くなる』

『ところで、そのキャラは新しく作ったのか？』

『そう。戻ってくるの面倒だったし、サブキャラ作ろうとも思ってたから』

『何故その名前にしたんだ？』

『近くにティッシュあったから』

身も蓋もない名付け方だな。でも意外と悪くはない響きだ。まあ、真っ先にティッシュを想像するが。

『自分の名前じゃ駄目なのか？』

『メインキャラが伊織。カタカナは使用されてた。ゲームキャラにも何人かいるからかも。八神流古武術使いとか』

へえ。誰だそれ。

『で、何をすればいいんだ？ 狩りに行くのか？』

俺は右も左も分からぬ初心者だし、経験者である伊織に聞くのが最善だろう。

『そこに名前の横にフキダシアイコンが表示されてるNPCがいるでしょ』

ネピアが向いた方向にカナメを動かすと、少し離れたところに“キース”という名前のキャラがいた。黄色のフキダシアイコンが確かに見える。

『NPC？ アイドルグループか？ 48みたいな』

『ノンプレイヤーキャラ。このゲーム内に元々いるキャラのこと。会話だけの場合も多いけど、クエストとか持つてることもある。普通の名前が黄色いのがそう。ちなみにあのキャラは初心者にアドバイスをくれる』

なるほど。まずはキースに助言を受けるのがいいってことか。

他の初心者プレイヤーが集まっているのか、キースはサインを求められるアイドルみたく囲まれている。こうも人がいて話しかけられるのか？

そう考えながら、無精髭のオッサンに近寄り話しかける。

『よう、おのぼりさんって面してやがるな。オレでよければ何でも聞いてくれ』

声があつたなら気のいいオジサンといった感じの台詞だが、通常の会話と同様に頭上にフキダシが出ただけだ。

そして選択肢出る。

ゲームの目的から操作方法まで。どれも説明書を読んでいれば分かっている内容だったが、とりあえず全ての選択肢を選んでから『もういいです』と話を終える。

『そうか。まずはジョブを決めるのを勧めるぞ。このセントラルにも幾つかジョブギルドはあるからな。行ってみるといい。良いCR OSS・FANTASIAライフを送れよ』

キースから離れ、カナメは再び噴水前へと戻り、

『ジョブギルドってどこにあるんだ？』

打ち終わって画面に目を向けると、ネピアは呑気に欠伸をしていた。これはしばらく操作してないとする行動だったか。

伊織からの反応が遅い。これまで俺のタイピング速度をあざ笑うかのように、すぐさま言葉が返ってきたが。

トイレでも行っているのだろうと考え、待つことにした。

三分経過。待ちくたびれたのかカナメとネピアは向かい合って身体をほぐしている。

俺は欠伸をしながら、時計に目をやると十時半を回っていた。まだまだ夜は長いぜと目をギラつかせる人もいるかもしれないが、俺の瞼はさつきから重みを増してきている。

俺の朝は洗濯と弁当作りから始まるし、朝練に出かけるひよりの朝飯の用意もあるして五時半時起きだ。この時間になると眠気が襲い、必然的に規則正しい生活となってしまうっている。

今日はまだ付き合うつもりだが、明日に差し支える時間になるまでにはやめることを告げようかと思っていると、返答があった。

『眠いから今日はやめる。ごめん』

まさか伊織から先に言われるとは予想外だった。少し悔しい。『そうか。おやすみ』

『昨日から寝てなかったから』

聞いてもないのに理由を話してきた。

『寝ろよ』

『一日くらい寝なくても平気。昨夜はPT抜けるタイミングがなかった。かなめもいずれ分かる』

睡眠を後回しにするくらいに没頭する理由を分かりたくはないが、睡眠は大事なんだぞ徹夜は肌に悪いし。伊織が気にする性格とは思えないが。

『なら、俺もやめようと思うが、どうしたらいいんだ？』

『何が？メニューからログアウトを選ぶだけ』

『いや、セーブとか必要なんじゃない？』

『セーブは必要ない。今やめたら次プレイする時はここから始まる。もしセーブできるなら失敗してもやり直せるし様々な矛盾が生じるから。MMOの常識』

だから、そんな常識は知らんがな。

『わかった。というか、明日学校くるんだろうな？』

寝過ごして昼前だったりしたら普通にサボってゲームとか、伊織ならありえそうだ。

『多分行く』

多分か。

『明日ジョブについて教える。無知のかなめのことだし、適当に育ててPTで役立たずと罵詈雑言浴びそうだから』

既に浴びせられてると言いたくもあつたが、

『じゃ明日頼む。おやすみ』

『おやすみ』

そう言いネピアの姿が光に包まれて消失した。

俺もログアウトしてノーパソの電源を落とし、大きな欠伸をひとつしてベッドに潜り込んだ。

第七話『ジョブ、選びますか』

周囲から集まる視線が少し気にかかる。

俺はサツと、ランナーの様子を窺う投手のように顔を向けると、視線を逸らされ何事もなかったかのように会話に戻り、箸を動かす。これは俺への淡い恋心を抱いている奥手な同級生からではないことは明白だ。男女問わずに向けられていた視線には、羨望や嫉妬は含まれてはおらず、珍しい光景を見るような、訝るような、そんな視線だった。

「意外とまとも」

弁当を開けて中身を一目見ての感想をボソリと言う伊織も気に掛かるのか、表情は変わらないが尻を僅かに浮かせ、心持ち窓の方に身体を向ける。ここ数日で分かったことだが、伊織は人付き合いを嫌うというより苦手なのだと感じた。だから意図的に避けてるのだと思う。

今日にしたってそうだ。

挨拶をしても『学校じゃ他人よ私たち』とでも言うように盛大に無視を決め込まれたし。だが、俺としてはそんな関係は嫌だし、迷惑がられるのを覚悟で昼休みに伊織に話しかけた。二つの弁当を持つて。

「もう少し気の利いたこと言えないのか」

「勝手に持ってきたのに、その要求は図々しい」

憎らしいことを呟きながらも、おろしたての箸を持つ伊織を見て、心底嫌がられてる訳じゃないと安堵する。

俺は机の広い辺を伊織の机の横にくつつけてから座り、自分の弁当箱を開ける。右半分に唐揚げに野菜炒めに卵焼き。残り半分はふりかけご飯が詰まっている。

伊織の弁当もこれと全く同じだ。

いつもより一人分多く作るだけだから大した手間ではないし、こ

れで伊織との距離が縮まるなら安いものだ。ちなみに冷凍食品はな
るだけ使わないのが俺のこだわりだ。

一口サイズの唐揚げを口に入れる伊織を見て、つい顔が綻ぶ。伊
織がグルメレポーターのように美味さを表情に出しているからでは
ない。伊織は無表情で黙々と租借している。

けど、辛らつな言葉がないってことは文句はないってことだし、
あとこうして机を合わせて弁当を食べるというシチュエーションも
嬉しかったりする。坂本はいつも購買のパンだったし。それに異性
というだけで希少性が段違いに変わる。

伊織も普段はそちらの組だ。昼休みになると何も持たずにフラリ
と教室から出て行き、チャイムが鳴るギリギリにフラリと席に戻っ
てくる。学食か購買かは定かではないが。

伊織に弁当を差し入れた理由はそのことを知っていたのと、あと
一つ。

「なあ、伊織」

俺は声を潜めて言う。

「……なに？」

卵焼きを箸で切っていた伊織は顔を上げ黒い瞳を向ける。

「昨日の話だが、今は駄目か？」

「昨日の？」

「ジョブのこと教えるとか」

理由とはこのことだ。教えてくれる礼も兼ねての弁当でもある。

昼休みにでも食べながらゆっくり聞こうかと。

だが、ここでもいい話題か判断に迷った。教室内というオー
プンな空間でオンラインゲームの話をしてもいいのか。

クラスメイトに伊織がゲーム、それもオンラインゲームをする人
という認識はあまりないだろうし。伊織も思われないようにしてい
たかもしれない。

まあ、クラス内の伊織の印象はミステリアスがよく分からないが
殆どだろうし、伊織が外部の印象に気を配ってるとも思えないが、

万が一ということもあるから声を抑えて聞いた。

「別にいいけど。……説明が面倒くさくなりそう、かなめだし」

「細かい説明は必要ない。朝にネットで予め調べてきたからな」

「そう」

伊織は卵焼きを口に運びながら言った。

「ジョブっていうのは、クリスタルのかけらを手に入れることで選択できる数が増えていって、経験値とは別にジョブポイントにより成長し、アビリティを覚えることができ、他のジョブの時も使うことができるんだろ？ あと、すっぴんともものまねしはマスターしたジョブの特性を得ることができるとか」

俺は得意げに説明した。いつまでも無知の冠は付けられてはたまらないからな。

「……………」

あれ、どうして黙っているんだ伊織は。さげすむ言葉もないくらいに完璧だったと受け取っていいのか？

「なんだ？ FFの話か？」

背後から声が掛けられ振り向くと、購買のパンをボールのように弄びながら立っている男子がいた。

「坂本か。FFって何のことだ？」

「オレも混ざっていいか？」

俺の疑問を流し、坂本は机を指さしながら聞く。坂本とは同じクラスだが、俺と伊織がいつしよに弁当食ってるという光景にちっとも不思議そうな顔はしていない。

「俺は構わないが」

と、伊織に伺うように視線を向ける。拒否したら坂本には悪いがお引き取り願おう。

「別にいいけど」

伊織はアツサリと坂本の同席を認め、

「サンキュ。早崎さん」

爽やかに笑いながら坂本は今は不在の前席の椅子を寄せて座り、

パンの封を開けてかぶりつく。

「やっぱり購買の焼きそばパンは美味しいな」

坂本は簡潔に味の感想を述べる。焼きそばパンは購買部で世代を越え人気を不動のものにしている伝統の一品。取り合いにより昼休みは戦場になると聞くが、坂本の昼食は毎日焼きそばパンである。歴戦の勇士かこいつは。

「かなめ、誰こいつ？」

その様子を黙って見ていた伊織は俺に視線を向け聞いてくる。本当にクラスメイトの顔と名前覚えてないんだな。

「坂本藤二郎」

俺がそれだけ伝えようと、

「要の無二の親友」

坂本は俺を指してそう付け加えた。真面目な顔で言わんでくれ。むず痒い。

「そう」

「よく隣で要と話してるんだけどな、本当に知らない？」

伊織は小さく首を振る。

「全然」

苦笑を俺に向ける坂本に俺も苦笑で返し、

「俺も目しか覚えられてなかった」

「そか。で、何の話してたんだ？」

全く気にしてない様子で、坂本は椅子の背もたれに肘を乗せながら話題に乗っかろうと聞いてきた。多趣味である坂本はどんな話題でも相応の知識を持って参加できるからそれなりに人気がある。ま、顔もそれなりなのもあるか。それなりに。

「伊織にジョブについて教わろうとしていたとこだ」

「さつきも少し聞いたが。要、ゲームでも始めたのか？ しかもレトロゲーを」

意外そうに言う坂本。というか、

「レトロゲー？」

「さっきのつてFF5だろ？　かなり古い作品だぞ。リメイクはされてはいるが」

「えふえふ？」

坂本の言ってることがよく分からない。最近もこんなことがあったような。

「違うのか？　どうみてもFF5かと思ったが」

「それ、かなめの勘違い」

黙ってやり取りを聞いていた伊織が口を挟む。確かに坂本は勘違いをしているみたいだし、ビシツと言ってやってくれ。

「多分“ジョブ 説明”とでも検索して、出てきたFF5のページをCFのページだと勘違いして覚えたと思う。馬鹿のかなめのやりそうなことだ」

なんで俺の行動を知っているんだ伊織は。

「……勘違いしてたのはもしかして俺ってことか？」

「そう」

伊織はあっさりと頷く。

「……そうか」

誰か教室内に時間を戻せる人はいらっしやいませんか？　得意げに言った自分がもの凄く恥ずかしく思えてきたんでなかったことにしたいんですが。

「どんまい」

と、坂本は俺の肩に手を置く。その表情は悪戯っぽく笑っている。誰か穴を掘ってくれないか？

「あながち間違ってもないけど。ジョブはキャラのレベルとは別にレベルがあるし、覚えたスキルは他ジョブでも使ったりできるから……怪我の功名？」

使い方に不安があるのか小首を傾げて言う伊織。調べたことが全く無駄だったってわけじゃないみたいだし、そうかもしれない。

「FFじゃないみたいだが、何のゲームの話なんだ？」

「CROSS・FANTASIAっていうゲームだが。知ってるか」

？」

「最近話題のMMORPGのことか？ 評価は高いみたいだな。オレはやってないが」

「知ってるのか」

タイトルはともかくMMORPGって言葉がすらりと出ることが意外だ。そこまで浸透していたとは。

「意外そうな顔だが、要がMMOの話をしているってことの方がもっと意外だぞ。どという風の吹き回しだ」

ひよりと同じような反応だな。そのうち俺がオンラインゲームをしてると知ったら天気の手配をする奴も出てきそうだな。

俺は唐揚げを一つ減らし、

「まあ、色々あったんだよ」

坂本にはそれだけで十分だろう。

「そっか」

坂本は予想通り深くは突っ込まずにさっぱりとした反応をする。

このしつこくない性格が俺は好きだ。俺の致し方なくやってた主婦業に対しても、褒めもバカにしたりもせずこんな風だった時は嬉しかった。

「じゃ、話の続きをどうぞ」

手のひらで紳士的に差しだし坂本は促した。えっと、どこまで話が進んでいたっけか。

「ジョブっていうのはそのFF5つてのと似ているってことでいいのか？」

「ま、大体は。けど、ジョブレベルは最大99あるし、スキルの数も違う。世界観的なことについては説明書に書いてあると思うし、省く」

焼きそばパンを食べながら坂本はふむふむと相槌を打っている。

「じゃあ、何を教わればいいんだ？」

弁当を半分くらい減らしている伊織は、

「MMOは育成が大事。それには装備にボーナスステータスの振り

方とか色々あるけど、ジヨブが一番重要」

「キャラのレベルは？」

坂本が聞く。お前は未プレイなんじゃなかったのか。

「それは普通にプレイしてれば上がるから。生産専門プレイなら別だけ」

「生産プレイもできたんだ」

「そんなにはいないけど、プレイスタイルの一種としてはゲーム的にも確立してる」

二人の会話に俺の理解が追い付かない。

「あ……育成はどのくらい大事なんだ？」

このままだと会話と話題から俺がフェードアウトしていくのを危惧し、俺は怖ず怖ずと割り込んだ。

「プレイスタイルは人それぞれではある。基本的に。けど、PT組んだり効率を考えたら、育成はしつかりとしないと駄目」

「PTってプレイヤーといっしょに戦うことだろ？ 具体的に何が駄目なんだ？」

「野良PT……知らない人達と即興で組む場合は効率を求めることも多いから、キャラのレベルに見合わない強さだと批判を浴びたりする。『使えない』『真面目にやれ』『蹴るから』とか罵詈雑言の嵐」

淡々と伊織は言う。

新人イビりを思わせる言葉だが、ゲームで本当にそう言われることなんてあるのか？

「そういう人がいるっていうのは聞いたりするが、そこまで酷い方が少ないとも思うけどな。未プレイ者の想像でしかないけど」

「レベル50までの狩場なら少ない方みたい。それ以降の狩場は効率厨が増えてくると掲示板で見た。私は基本ソロだったから見たことない」

「だったらそこまで気にする必要もないんじゃないのか？」

「かなめが役に立たなかったら私が言う」

「おい……」

身内に罵倒する奴がいたよ。既に頻繁に浴びてるが。

「半分は冗談。だけどジョブ毎の特徴と育成方針は知っていたほうがいいと思う。実際にそうするかはかなめが決めればいい」

「半分かよ」

結局は役に立たなかったら罵倒されるんじゃないか。

「普通のオフラインのRPGでも攻略にあたつての効率的なキャラ育成は大事だな。楽に進めるためには」

「一般的なRPGなら初めから育て直す手間はあまりないけど、オンラインは時間が掛かるからよく考えた方がいいことは確か」

坂本と伊織のアドバイスを有り難く受け取ると、やはり育成はちゃんとした方がいいのだと思わせられる。罵詈雑言を浴びたくもないしな。

「まあ、せつかくやるんなら強くはなりたいたいし、教えてくれると助かる」

「要、昼休みあと僅かだぞ」

伊織を見据えて俺は言うと、坂本からそう告げられる。時計を見るとチャイムまであと三分に迫っていた。

「うお、やばい」

慌ててまだ半分は残る弁当を食う作業に集中する。伊織は今し方食べ終えて手を合わせていた。意外と礼儀正しいな。

「かなめ、続きはどうするの？」

かき込んだご飯を租借しつつ、俺は脳内の予定表を開く。授業を終えた後は帰宅して洗濯もの取り込むくらいだし。

「帰りにどこか喫茶店辺りとか」

「かなめの奢り？」

「まあ、飲み物くらいなら」

「じゃあ、それで。坂本は？」

俺は目を見開いて驚いた。伊織から誘うようなことを聞くとはい…

…ゲームをする者同士だから波長でもあったのか。

「是非聞いてみたかったが、用事があつてな。すまん」

坂本は片手を胸の前に挙げて申し訳なさに断った。

「そう」

伊織は残念そうな様子もなく、俺の前に弁当の空箱を寄せて、

「五十五点」

俺の自信からしたら辛口な評価を告げた。

「酷い点だな」

俺は苦笑する。

「……………」

伊織は何も答えず頬杖を突いて窓へと顔を向けた。

俺は小さく息を吐いて、弁当を食う速度を速めて、また持つてきてみようかと考える。今度は更に良い点を言わせようと心に決めて

第八話『ジョブ、決まりました』

下校時刻となり、俺と伊織は並んで校門から出た。

これから喫茶店で語らうといえど、端からみたら中々の青春成分を感じさせる一ページだが、会話の内容はゲームである。それも生徒と先生のような立場だ。

優しく教えてくれることはなく、少しでも理解が乏しかったら容赦のない罵倒が飛ぶという厳しい指導だ。

でも、嫌ではない。いや、そういう趣向があるという意味ではなく、同じ趣味で話せる人はいなかったからな。共通の話題で盛り上げられるのは嬉しいものだ。

無言で隣を歩く伊織と共に向かう喫茶店は帰路の途中にある。帰り道はいっしょの方向なわけだし、帰宅時間も考えるとその方がいいだろう。そう言っていると伊織も頷いた。

喫茶店に入り、席へと着く。

丁寧に拭かれ窓ガラスから差し込む光を反射する白いテーブルを挟んで座る。

伊織は鞆を隣に置くと、物珍しそうに置かれた角砂糖などを眺めた後、メニューを手にとって眺める。

「意外と豊富」

伊織は淡々と言う。コーヒーのことだろうか。軽食を含めてもこの店のメニューは多い。それに味もいい。坂本やひよりと何度か訪れたことがあるが、いい店だと思う。雰囲気も落ち着いているし。BGMのクラシックも邪魔にならず耳心地よい。

「伊織は来たことないのか？」

訊ねると、伊織はメニュー置いて、

「喫茶店に入ったのは初めて」

真顔で言う。それはあってもおかしくはないか。俺も誰かといっ

しよじゃないと入ろうとは思わないし。

「そうか」

「……憐れnder?」

瞳を細めてジッと睨むように見てくる。

「いや。俺だつて数えるくらいしか入ったことないし」

「そう」

素っ気なく言つて伊織はメニューに視線を落として黙る。

「ご注文はお決まりですか?」

若い女性店員が注文を取りに来て、俺は無難にコーヒーと答えた。そしてメニューから顔を上げた伊織は、

「スーパーウルトラハイパーミラクルストロングエベレストデラックスパフェとコーヒー」

長々とした名称をスラスラと言うと、店員は一礼して席を離れる。

俺は噛まずに早口言葉のように言つたことに感嘆し、

「奢るのは飲み物だけだぞ」

今月は出費が激しかったし、メニュー中最大の値段とボリュームを誇るパフェを奢れる余裕はない。

「分かつてる、自分で払う。で、ジョブについてだけ」

唐突に本題に入ってきたな。

「説明書を読んだならジョブの種類は把握していると思うけど、かなめは何になりたいの? 直感でいい」

「ジョブだろ? だったらボクサーだな」

俺はシュツと固めた拳を構えて軽く突き出すジェスチャーをする。

右ジャブ、左ジャブ、右ストレート。

右ジャブ、左ジャブ、右ストレート。

仮想の相手が繰り出すパンチを避ける動作も折り込みながら、座りシャドウボクシングを続ける。

ジャブ、ジャブ、ジョブ……うん、伊織の目が冷たい。ツツコミはなしですか。

ついでに周囲からの視線を浴びているのがヒシヒシと伝わり、顔

が茹だつたタコのように真っ赤になつてるのが自分で分かる。鏡は見たくない。

「……えっと、ジョブは確か十個くらいあつたな……」

説明書には二ページを使いジョブの一覧に簡潔な説明文が添えてあつた。

「正確には十五。かなめは数も数えられないのか？」

「コーヒー代出すのやめるぞ」

「うる覚えは誰にでもあると思う。落ち込むな、かなめ」

分かり易い変わり身だな。落ち込んでたわけじゃないが。俺の心を針でつつくよりコーヒー代の方が重要らしい。

と、ここで注文した品が運ばれてきた。

まず芳香と湯気が立ち上るコーヒーが俺と伊織の前に置かれ、そして一旦奥へと戻つて再び出てきた店員は、両手で優勝カップのような大きさの容器を持つて慎重に残りの一品と銀のスプーンを置き、「ごゆっくりどうぞ」とマニュアル的な一言を凜とした声で言い去つていく。

「……………」

これが目の前にそびえるスイートタワーの感想である。

伊織の姿を覆い隠すほどの高さを誇るパフェが産み出された過程は定かじゃないが、盛られたクリームから顔を出す数多のフルーツのように付けられた修飾語から察するに、その場のノリだったのではなかるうかという安易な想像が浮かぶ。

そもそも名称からして意味被つてるし。「ウルトラでよくね？」

「お、それいいな！　じゃ、スーパ―も付けるか」そんなやり取りがあつたのではなかるうか。

カタツとパフェの向こう側で音がした。

伊織がスプーンを手に取り、パフェを胃に収める作業に取りかかったのだらう。

ウルトラ——中略——パフェはまるでメルヘンの世界ならばお菓子の国に存在する山だ。その高さは標高一メートルはあるだらうか。

向かいの伊織の姿を隠してしまっている。溶けないように敷き詰められた砕いたドライアイスが発する冷気がこちらまで届く。

それにしても美味しそうだ。フルーツや菓子はともかくソフトクリームの一舐めくらいは許してくれるだろう。と、訊ねずにパフェへと指先を伸ばそうとすると、カップの脇から出てきた手でパシリと弾かれた。

「私の。かなめは意地汚いな」

向こう側から冷めた声が聞こえた。というか何故見えたんだ。

「いや、少し味見を……つか、そんなに食べれんのか？」

全部食ったらお腹を冷やすどころでないと思うぞ。

「食べれる。かなめはさっきの話の続きを考えてればいい」

伊織はそう断言した。とても華奢な体に収まりきる量じゃないが、ミルクの海が残る未来しか想像しえないのだが、パフェ代は伊織が払うんだしとやかく言うことじゃないだろう。

「……さっきの話か……」

俺は腕を組んで先程の話の流れを思い出そうとする。パフェのインパクトで吹き飛んでしまった。

ああ、ジョブか。ジョブを何にしたいか聞かれたんだった。

昨夜、ゲームを終えた後寝る前に説明書を開いて、ジョブの項を読み直していた。その中に惹かれるのが一つ。

「パラディンになりたいとは思ってたが」

闇を切り裂く聖なる騎士——そんな説明文に書かれていた。実にパラディンらしい響きが俺の心の琴線に触れた。ゲームの世界でなら俺も騎士になれるのだと。

「かなめ。それ、上級ジョブだから今はなれない」

「上級ジョブ？」

「そう。基本ジョブは主要都市で無条件で変更できるけど、上級ジョブは特定のクエストクリアしないと解放されない。パラディンだと『神殿騎士認定試験』がそう」

クエストというのがまだ理解できてないが、つまり今は無理って

ことか。

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

伊織は山を順調に崩し、ようやく伊織の頭が山の向こうに見えた。なんたるハイペースな食いつぶりだ。大食いには華奢な人も多いが伊織がそれなのか。というか冷たいものを食べてるのに頭痛はしないのだろうか。

しばし、パフェを減らすさまを見続けると、ふいに伊織は顔を上げる。

「……ジョブレベルが成長しない『旅人』のまま進める手もあるけど、それだとクエストのクリアは難しくなる」

「だったら、それまで他のジョブになつてたほうが得じゃないか？」

「一概にそうともいえない。ジョブレベルの合計が高くなるほど上がりにくくなるから。元々上がりにくい上級ジョブはそれが顕著」

「だから、伊織はサブキャラを作ったのか」

「かなめにしては理解が早い」

そう言つて伊織は僅かに口元を綻ばせる。評価がマイナス10からプラス10になったくらいの言葉ではあるが、ここは素直に喜んでこつ。

「時間を掛ければ一キャラで全ジョブレベルマックスも可能だけど、それだと不眠不休で数年掛かるとされているし、能力値もどっちつかずで結局は弱くなる。物理系なら物理系で育てて、魔法系なら魔法系で別キャラで育てた方が早いし強くなるし」

「不眠不休は無理があるだろ……」

「いるらしいけど。常時ログインしてかつ寝落ちしないキャラ」

「……マジか」

寝ずにプレイし続けるなんて不可能だろ。その疑問に答えるように伊織は言う。

「噂では仲間内で交代でプレイしてるとか、バイトでも雇ってやらせているとか言われている。あと、中の人が存在しない説もある、まあ、これは一種のオカルトめいた類の話だけだ」

「そこまでするか普通？」

「ネトゲならあってもおかしくない話」

どんな世界だよネトゲって。

「将来的にパラディンに就くつもりなら、今は戦士か司祭を選べば無駄がないと思う」

「戦士か司祭だな」

言いながらも伊織は順調に減らしていつている。おっと、溶けてきたアイスに刺さったウエハースが傾いて今にもこちら側に落ちそうだ。取って代わりに食べてやるか。と手を伸ばすと伊織にスプーンで叩かれた。地味に痛い。

「私の。……だけど、そのくらいならいい」

伊織は食事を邪魔された犬のように鋭い視線を向けたが、少し考えるように目を伏せてからそう言った。俺が叩かれた意味は？

「あ、じゃ遠慮なく」

ウエハースを抜き取ってついでにクリームをたっぷり付けて一口。サクサクとした食感にほろりと口の中で広がる甘み。まさしくウルトラ——中略——パフェという名に相応しい。

「どっちにするの？」

「何がだ？」

「戦士か司祭」

「今決めると言われてもな。よく分かんないんだが」

「……仕方ないな。一度しか言わないからよく聞いというて」

伊織の声がよく聞こえるように俺は少し体を前に倒す。メモの用意は必要ないだろうか。

「パラディン解放クエストの適正レベルが15だからそれを基準に話の話を話だけ、戦士からパラディンになるなら、クラスチェンジは剣士にすべき。そこまでに覚えるスキルで【両手持ち】と【挑発】があるから、ソロでも火力は申し分なくて、パーティだとタゲ取りもできるパラディンになれる。パラディンは剣士より防御高いし、スキル【聖なる加護】もあるから、タゲ取りに最適だと思う。一応

パラディンだけでも【かばう】あるからタゲ取り代わりにはなるけど、【挑発】の方が便利。成長補正もパラディン向き」

饒舌に伊織は戦士経由でのパラディンのメリットを説明してくれた。……ことだけは分かった。

「……………」

メモかICレコーダー用意しとくべきだったか。そうすれば帰宅して意味の分からない単語をゆつくりと調べられたし。

聞き馴染みのない言葉を一度聞いたくらいじゃ、歩いてる最中にぼろりと抜け落ちてしまいそうだ。

そんな俺の整理できてない頭を知ってか知らずか伊織は続ける。

「次に司祭からパラディンにするパターンだけど、一般的に司祭は後衛キャラのイメージで物理攻撃は苦手な印象があるけどCROSS・FANTASIAの司祭は、物理系もこなせる。むしろアンデッド相手の火力なら戦士以上。成長補正は物理向きじゃないけど、MPと精神はパラディンにも必要な数値だし問題ないと思う。スキルは対アンデッドを覚えるし、パラディンは対悪魔スキルがあるからその二種族相手ならかなり楽になる。回復魔法もあるからソロでも困らない」

一度も噛むことなく言い切って、伊織はコーヒーを飲む。

「……………」

どうしよう。英語教師のネイティブな発音より意味が分からないホワイ？ と言ってお手上げのジェスチャーをしたい気分だ。

「そんな感じ。どうするか決まった？」

小首を傾げられても、俺には今の説明を頭に留めることがやっとだ。それを踏まえての適切な選択は出来そうにない。

「伊織からしたらどっちがお勧めなんだ？」

「え……………」

虚を突かれたように伊織はスプーンを口にくわえたままこちらを見る。

「……私はできたら戦士からがいい。……私は魔法系にするし、盾役がいたほうが……その…便利だし」

「じゃあ、そうするか」

「かなめは主体性がないのか？」

「これに関しては経験者の意見を参考にしたほうがいいと思ったただけだ」

「そう」

伊織は三分の一となったパフェの完食へスパートを掛ける。

その様子を黙って眺めててもよかったが、俺は鞆から適当なノートを取り出して忘れないうちに伊織のジョブ講義の要点を書くことにした。

喫茶店から出て携帯で時刻を確認すると四時を回っていた。

伊織は、ウルトラハイパーベリーナイスグッドミラクルハッピーデラックスパフェ（うる覚え）を完食し。満足げな表情だった。

あの量が隣を歩く伊織のか細い体のどこに入るのか謎である。甘いものが入る別腹というのはブラックホールにでも繋がっているのだろうか。聞いてみても小馬鹿にされるのが目に浮かぶから訊ねはしないが。

帰ったら洗濯物を取り込んで——と帰宅後の行動を確認していると、
「今日はいつ来れる？」

伊織が黒い瞳を向けて聞いてきた。

「掃除でもしてほしいのか？」

あれからすぐ汚くなるなんてことはないと思うが。

伊織はため息を吐き、

「素なのか分りにくい」

「CROSS・FANTASIAの方だろ。今日は八時にはいけると思っ」

そっぴや百均の品で整理整頓してやろつとも考えてたな。近いうちまた行くか。

「そう。わかった」

それで会話はなくなり、先にある伊織のアパート前で分かれて俺は帰宅した。

第九話『はじめてのクエスト』

午後八時二十分。

食後の後片付けなどの雑事をこなして部屋に戻ったてログインした時には、伊織に告げた時刻を過ぎていた。

待ち合わせに遅れた心境でノートパソコンの電源を入れ、理由を問われたら正直に話すか面白い言い訳でもするか考えてると、視界の端でチカチカと緑のランプを光らせ着信を知らせる携帯に気付いて開く。

メールの着信が一件との表示。

多分、坂本だろうと思いつながらメールを確認する。本命は坂本で、次いでひより。それ以外が大穴。それくらい俺の交友関係は狭い。

「……ん？」

俺は怪訝に目を細めた。

知らないアドレスだ。件名はなし。

普段なら業者のメールだと訝って中身を読まずに削除するが、ふと思い当たる節があった。

『先に進めてる。インしたら囁チャよこせ』

差出人不明だが、この命令調の内容は伊織だと分かる。一応、メールアドレスと電話番号を覚えておいたからな。名前くらい書いてほしいが。

着信時刻を見ると、八時五分。俺がインしてないのを確認して送ったんだろう。五分か、もう少し待ってくれてもよかったんじゃないかとも思うが、約束の時間に行けなかったのは俺の責任だから何も言えない。

とりあえず伊織アドレスを登録して、俺はCROSS・FANTASIAへログインした。

『遅い』

昨日ログアウトした噴水前に出現してすぐにネピアに囁きチャットを飛ばした。

そして返ってきた言葉がこれである。

感情の含まれてない文字のはずなのに、伊織の冷たく言い放つてる様子がありありと想像できるのは、ネピアを動かす本人を知っているからだろ。

今も近くを通り過ぎる他人が同じ言葉を発したとしても、画面の向こう側の人がどんな表情なのかは想像しがたい。

『悪い。実は部屋の電波時計が狂っていて二十分遅れていたんだ』

俺はログインしてる間に考えておいた言い訳を話した。電波時計は正確に時間を刻むからな、だから全く言い訳になってないのが面白い。さあ、ツツコめ『電波時計が二十分も狂うわけないだろ』と画面の向こうで笑いを押し殺しているのか一拍あり、

『そう』とだけ返ってきた。

あれ？ まさかあれで納得したのか？ 説明が必要だったか。

『いや、電波時計がそんなに狂うわけないだろ』

『カナメは今、噴水前にいるのか？』

何故か流されたんだが。

『ああ。伊織は今どこにいるんだ？』

『ネピアと呼べ』

『なぜ？』

『ゲーム内ではキャラ名で呼ぶのがマナー……かは知らないけどそう呼んで』

現実とゲーム内で分けてほしいということか。

『分かった。で、ネピアは今どこに？』

『北門から出てすぐのところ』

『じゃ、今から向かう』

『かなめは三歩歩いたら忘れる鳥以下の頭なのか？』

俺の名前は普通に呼ばれたんだが。かなめも力ナメもさほど変わりはしないが。

『鳥頭は酷いな』

『鳥以下と言った。かなめこそ鳥に失礼だ』

『……なぜ、そうまで言われにやなんのだ』

『ジョブを決めるという話をしたばかりなのに忘れてるみたいだから』

返す言葉もない。

今日交わした会話を忘れたわけではないが、昨日の会話を失念していた。今日もそこで初心者相手に助言を授けてるキースさん、すいません。

『確かジョブギルドがこの街にあるんだったな。どこにあるんだ？』

『右上にマップがあるでしょ』

ネピアの言うとおり、画面の右上には邪魔にならない程度の大きさでこの辺りの地図が表示されているが……

『範囲が狭すぎて分からないんだが』

表示されてる地図はあくまで“この辺り”しか見えない。噴水の周囲とそれを囲むように建物があると分かるくらいだ。

『少しは自分で考えるべきだ、かなめは。分からないなら気軽に人に聞けるのがMMOのいいところでもあるけど、自分で試行錯誤して答えを見つけるのもRPGの醍醐味だぞ』

普通のRPGをプレイしたことない俺に醍醐味を語られても今一つ分からんが。

『……今日は育成のアドバイスしてもらったわけだが、矛盾してないか？』

『あれは、かなめがゲームを円滑に進めれるようにするアドバイス。かなめが無能と罵られて孤立しないように。人間関係は現実と同様に大事だから。私の優しさに感謝されこそすれ揚げ足を取られる覚

えはないし、プレイスタイルは自由とも先に言った」

まさか伊織に人間関係の重要性を語られるとは思わなかったぜ。

『ああ、悪かった。とりあえず自分でやってみる』

マップについては自力で解決することができた。虫メガネのマークで拡大と縮小が可能で、最大にすると街全体を見ることが出来るようになる。

最大にしたマップには、剣や盾などのアイコンがあり、カーソルを重ねると『武器屋』『防具屋』と表示されてアイコンの場所にその店があるのだと分かるようになっていた。

戦士ギルドの場所も判明し、今俺はそこに来ている。剣と盾が交差した看板を掲げる建物だった。

中は役所みたいな内装でカウンターがあり、そこにプレイヤーが並ばず順番を無視してるかのように押し合いへし合いしている。

シルバーの鎧を着て偉そうに腕を組んでいるNPCには話しかけず、俺もカウンターの集団に加わって受け付けの女性に話しかける。

『ここは戦士ギルドです。今日はどのようなご用件でしょうか？』

業務的な口調（文字だけだが）で受け付けの女性は言う選択肢が表れる。

戦士の特徴などが聞けたりするようだが、ネピアを待たすとグサグサと心をつつく言葉が増えそうなので『戦士に就きたい』を選んだ。

“カナメは戦士になりました”

そんなメッセージが表示され、カナメは拳を握りガッツポーズをした。

『これであなたは今から戦士です。どうぞ頑張ってください』

つんけんとした印象の受け付けの女性に言われて、カナメは戦士になった。見た目は全く変わらないが。頭上に表示されてる名前の頭に付いていたマントのアイコンが、剣へと変わっている。

最初のジョブは旅人だからマントで、戦士だから剣なのだろう。イメージ的に。

受け付けの人は少しは愛想良くしてほしかったが、これだけの人を一片に対応してるとそりゃ、ああいう言い方になるのも致し方ないなとゲーム内のキャラに同情しながら、ネピアへと報告する。

『戦士になった。北門でいいんだよね？』

『そうだけど、まずクエスト受けてきて』

『わかった』

そう返して俺はギルドから出ると、

『……本当に分かってる？』

『実は知らない』

『（……ハア。かなめは本当にアホだ）』

心の声かよ。わざわざ送ってくるとは。

『クエストは、一般クエストとストーリークエストがあつて……それはまだいいか。とにかく後で説明するから、120・40にいるクオンから受けてこい。座標の意味が分からないとか言わないよね？』

ネピアは俺を学習能力のない人間とでも思ってるのか。そういう言い方をするってことは説明書かここまでで知り得た情報ってことだろ。伊織は理不尽に現時点で知り得ないことを馬鹿にするほどではないだろうし。

『マップに表示されてるのがそうなんだろう？』

『そう』

右上マップにある二つの数字は現在地を表していることは、ここに来るまでに何となくは理解していた。

その数字を見つつ、カナメは指定された座標に向かうと、クオンと名前が表示されているNPCを見つけた。若い女性だ。

『ねえ、聞いてくれる？ さつき街の外で薬草を摘みに行ったんだけど、イタズラ好きのゴ布林たちに邪魔されて全然摘めなかったの。ホントにゴ布林には困ったものだわ。誰か何とかしてくれないかしら』

話しかけると女性に愚痴をこぼされた。すると選択肢が表示された。

- ・私が退治してきます
- ・それは困りましたね

一つはこの女性の悩みを解決する流れで、一つは適当に話を合わせるみたいな感じが。

イタズラしてくるだけの奴を退治するというのも、やりすぎな気がするが受けるとネピアも言っていたし退治を申し出る。

『まあ、何て頼もしい御方なんでしょう。それじゃ、十匹くらい倒してきてもらおうかしら。倒してきた証拠としてゴブリンの角を持つてくれるかしら。それじゃ頼んだわよ』

急に上から目線になったんだが。ゴ布林という奴の角を持ってこいとか、イタズラの仕返しにしてはやはり度を越してるだろ。どんだけ邪魔されたことを恨んでるんだよ。

“ゴ布林退治のクエストを請け負いました”

そんなメッセージが出たのを確認し、俺は北門へと向かった。

スタート地点であるセントラルは東西南北にそれぞれある国——通称四大国——に囲まれるように位置する街だ。

様々な国が領土を巡る戦いをする中、唯一争わない姿勢を貫く中立国。そこがセントラル。

四方を高い城壁に囲まれ、東西南北にある門から街の外へと出る

ことができる。

カナメが開け放たれた門を出ると、草原が広がっていた。プレイヤーの姿もちらほらと見え、角の生えた半裸の人型の生き物と剣や弓矢で戦っていたりする。頭上に表示されている名前を見るとこいつがゴブリンのようだ。

その戦っているプレイヤーの中に藍色のセミロングの後ろ姿を見つけた。名前はネピアとあるから間違いはない。

『クエスト受けてきたぞ』

近寄って声を掛ける。ネピアは杖を振って小さな火球を生み出してそれをゴ布林にぶつけている。

——ネピアさんよりパーティの誘いがありました

いきなりメッセージが表示され『はい』か『いいえ』かの選択を促してくる。

パーティの誘いか。伊織は俺のオンラインゲームデビューを祝ってくれようとしてくれてんだな。素直じゃないなあ。

……違うのは分かっている。パーティといってもそっちの意味じゃないくて、仲間になるという意味だ。

俺は快く誘いを受けてパーティに加わる。すると画面右下にネピアのHPとMPが表示され、ネピアの頭上の名前に人のシルエットをしたアイコンが表れた。これがパーティを組んだ証明のようだ。

『よろしくお願いします』

赤色で表示された言葉に俺は驚きを隠せなかった。ゴ布林に火の玉を浴びせ続けながら言うのはシールドではあるが、問題はそこじゃない。

『……急にどうしたんだ？』

伊織が礼儀正しくなるなんて悪いものでも食ったか、或いは空腹か。今すぐ何か差し入れに向かったほうがいいか。

『パーティでの礼節を教えてあげただけ。オンラインゲームでは他

人と接する時は不快にさせる発言はしないのが最低限のマナー。 :

ただしカナメは除く。公式サイトにも書いてある」

『いや、なんで俺だけ！？ 絶対に書いてないだろそんなこと』

『そういうタイピングが早いのは感心するけど、まずパーティチャットにしたら？ 文字通りパーティ内にしか聞こえないチャット』

やり方を訊ねるともなく罵倒が付いてくるから、チャットウィンドウの周辺を調べてみるとパーティチャットに切り替えることができた。

俺は早速タイピングして、

『ネピア、さつきから何故俺を攻撃してるんだ？』

カナメはさつきからネピアの放つ火球の標的にされ『グア』『ウワ』とか声を出しながら、仰け反っては元にも戻るを繰り返している。HPも当たる度に減っていつてるんだが。

眠たげな瞳を向け杖を振り続けるネピアの姿は妙な怖さを感じられる。このままだとHPが減る一方だし、気分のいいものでもないからカナメは火球を避けようと左右に移動するが、火球はカーブして俺の動きを追って的確にこちらに向かってくる。

HPの数字が赤くなってからようやくネピアの攻撃は止んだ。そして、

『操作ミス』

と、ネピアは言った。

『それにしてもしつこい攻撃だった。わざとだろ』

指摘するとネピアは再度杖を振る。放たれた火球が向かうのは当然のごとくカナメだ。

『操作ミスはよくあること。カナメは人を信じられないのか？』

ネピアは俺に恨みでもあんのか、と言おうとして、ふと引っこかった。

『意外そうな反応をしたことを怒ってるのか？』

礼儀正しく挨拶をしてきたことに対してだ。考えてみると失礼だ

つたかもしれない。

『操作ミス』

少しの間の後、ネピアは再三そう主張して、

『それにしてもカナメ、死にそうだな』

例のショートカットに登録している嘲笑を浮かべた。誰のせいだ。

『どうすりゃいい？』

HPを回復するアイテムは持ってないしな。

『安心して』

ネピアは刺々しい嘲笑を柔らかな微笑みに変える。これもワンタツチなのかね。

『回復の魔法でもあるのか？』

『ううん。レベル5以下はデスペナはないから。死んでも大してリスクはない』

『デスペナ？』

『デスペナルティの略。HPが無くなると科せられる罰。一定時間能力低下するだけだけど、レベルが高くなるほど時間も長くなるし低下率も増していく』

『じゃあ、死ねばいいのか？』

現実で言ったらヤバい発言だな。

『死んでも今ならセントラルに戻されるだけだから。けど、私の責任みたいで嫌だし、特別に回復アイテムを恵んであげるからそれで回復して』

『みたいじゃなくて、今減ってる分は全部ネピアの責任なんだが』

ネピアは無言で杖を振るとカナメに火球をぶつけてきた。

『ごめん。操作ミス』

『今のは百パーわざとだな』

『人を疑うばかりの人生は空しいと思わない？』

『……そうですね』

俺はツツコみを放棄してため息を吐いてると、ネピアからアイテムが送られてきた。

エックスポジションが……五十個。鞆のアイコンをクリックしてアイテム欄を開くと、枠が半分近く赤い液体が入った瓶で埋まっていた。

『凄いな』

『店売りしてるのだと最高のライフ回復アイテム。感謝しろ』

『……何でそんなに持つてるんだよ』

ネピアは新しく作ったばかりのキャラのようだし、この世界の通貨のGは俺と同様にはいはずだが。無一文。

『倉庫は一アカウントで共有されている』

『つまり、メインキャラのアイテムを持ってきたってことが』

『そう』

『なんかズルいような気がするが』

『育成に関してのメリットは回復アイテムと金に困らないくらい。』

生産専門なら素材に困らないのもあるけど。装備は必要レベルと能力値があるから、初心者とシステム面での極端な差は生まれにくいようになったる』

『へえ』

『まあ、用意しとけば必要レベルに達した段階ですぐに最適な装備にできたりはするけど。その辺は長時間プレイしている人のメリットとして当然だとは思っ』

長い説明をしながらも、ネピアは近くに光に包まれながら現れたゴブリンを攻撃している。俺は受け取ったポジションでHPを全快にして攻撃に参加——確か、スティックでカーソルを敵に合わせて、技を設定したボタンを押すだったか——する。

カナメは両手で持った剣を振りかぶってゴブリンに振り下ろした。ダメージはネピアの火球より少し高いくらいだったが、既にゴブリンの頭上にある赤い体力ゲージは僅かだったため、ゴブリンは倒れた。

「お」

俺は思わず声を漏らした。

ゴブリンの角を手に入れたというのがメッセージとして流れたからだ。

『これを十個集めればいいのか?』

『出たのか。そう、これを十個集めて依頼主持って行けばクエスト成功』

『あの、上から目線な人にか』

『このゲームのクエストは大抵そんな感じ』

『ネピアは幾つ手に入れたんだ?』

俺より早くにログインしてたから、結構溜まっているとは思うが。
『八つ』

『あと二個か。早いな』

『カナメが来たせいで遅くなりそうだけど』

『へ? 二人だから逆に早くなるんじゃないのか?』

『とどめを刺したキャラしか手に入らないから。沸き場所も余っていないから待たないと駄目だし』

そうなのか。沸きって何だと聞こうとして、また近くにゴブリンが現れたため攻撃する。

『沸きって何? とカナメのことだし聞いてきそうだから言っておくと、モンスターの出現のこと。出現する場所は誤差はあるけど決まってるからそこを沸き場所と呼ぶ。沸き時間はモンスターによって変わるから、次に沸くまで間に他の沸き場所に向かって倒すのが効率がいいけど、他のプレイヤーが来た場合譲るのがマナー』

周りを見ると、数多くのプレイヤーがゴブリンと戦ってるのが分かる。これが沸き場所が余ってないから待つしかない状態ってことか。

つか、マナーとか色々あるようだが俺には何一つ分からん。ゲームといっても人と関わるわけだから必要なかもしれないのは理解できるが。

ネピアがゴブリンを倒してから俺はようやく会話を再開できた。
『よく戦いながら会話できるな』

『馴ればできるようになる。　：ただしカナメを除く』
『またそれかよ!』

三十分ほどお互いにゴブリンの角を十個集め終わり依頼主に報告すると、ゴブリンを倒していた時よりも格段に違う量の経験値が入り、カナメのレベルが上がった。

『これがクエストの流れ』

隣で同じくレベルの上がったネピアが言う。

『クリア条件は色々だけど、レベルの低いうちはクエストをクリアしていくのが効率もいいし、ゲームに慣れていくのに適している』
『そうか』

『セントラルにも依頼主はまだいるから話を聞いてみたら』

『ああ、そうしてみる。が、今日はもうやめる』

振り向いて確認したら時計は十一時を指していたし。

『そう。その前に友達登録しない?』

え……… ということだ。友達って登録するものじゃないと思うが。
いや、そんなことよりも、

『俺たちはもう友達だろ』

送ってから少しばかり恥ずかしくなった。面と向かって(これはゲームだが)そう言うのは照れるものだしな。というか、否定されたらどうしようと不安だ。返答が中々こないから余計に。

『このゲームの友達登録機能の話。カナメはそんなこと言って青春漫画の主人公気取りか。恥ずかしくない?』

…… ああ、ああ、そうだった。思い出した。友達登録したプレイヤ―はログインとか居場所の情報などが分かるようになるんだっただけか。
確か。

『…… ちょっと勘違いしただけだ』
『そう』

こうしてネピアと友達登録を終えて、俺はログアウトしたのだった。

第十話『はじめてのパーティ』

オンラインゲーム『CROSS・FANTASIA』

今から一年前に発売されたこのゲームは、突き抜けた個性的なシステムはないが、丁寧な作りと自由度の高さからネット上の評価をぐんぐんと伸ばしていき、比例してプレイヤーの数も増えて、今や十万人規模となり、今一番注目されているMMORPGとなっている。

ちなみに伊織は約十ヶ月前に始めたそうだ。

そんな話を教室で伊織と交わしたりして、次第に俺もオンラインゲームのマナーや用語を理解していった。一つ覚えるたびに伊織の辛らつな言葉が突き刺さりはしたが、おかげで俺もだいぶオンラインゲームを分かってきた。まだ知らないことの方が多いだろうが。

ここ数日は毎日、夜にはログインして伊織に言われた通りクエストを進めた。一人で。

初心者向きのクエストだから、伊織は別行動で育成をするのとことだ。

俺はチュートリアル要素を兼ねたクエストをクリアしていき、セントラルで受けられる他のクエストもクリアし、俺は結構慣れてきたのではないかと自負できるくらいにはなり、より面白いと思えるようになってきた。

まだレベルは低いから覚えた特技は少ないが、それぞれに特色があり上手く使えば戦闘がかなり楽になる。

これは一例だが、戦士の初期スキル『振り下ろし』だが、これに続けて戦士のジョブレベル3で覚える『振り上げ』を繰り返せば与えるダメージが増える。

単純だがタイミングはシビアで、振り下ろしで武器が完全に振り下ろされる前に振り上げを行わなければならない。少しでもタイミングがズレると通常のダメージになる。

猶予フレームは7だとか伊織が説明してくれたが、俺は首を捻るしかなかった。坂本は『余裕あるな』と分かったように頷いていた。ちなみにスキルは各ボタンに登録できる。キーボードにも登録できるが、入力はい辛い。ため、コントローラーの利便性を認識できた。これはあくまでも一例で、他のスキルにもスキル説明文以上の能力が含まれてるのが殆どだとは伊織談。スキルを使い込むことで熟練度が上がり、一定以上になることで覚えるスキルもあるとか。

奥深さに感心するとともに理不尽さも感じたが、今だと交流掲示板もあり、ゲーム内のプレイヤーの話題のタネにもなって自然と広まっていくものだとか。

これの他にも戦闘システムにアクション的な要素が含まれており、単純にレベルの差では強さを量れないのも人気に一役買っているとか。

まだまだ俺はモンスターに倒されないようにするのが精一杯だが。

俺がCROSS・FANTASIAを始めてから一週間が経った。

『何だそれは……』

セントラルの噴水前に立つネピアに対して俺は驚きを隠せなかった。

『それ、って何が？ 具体的に言うこともできないのかカナメは』
わざわざ人を罵るような言葉を打つのは面倒くさくないのかと思いつつ、

『何だそのレベルは』

ネピアとはここ五日——つまりは一つ目のクエストをクリアした日以来——ゲーム内で会ったことはない。ずっと一人で淡々とクエストを消化していったし。

久しぶりという言葉を用いる程の期間じゃないが、久しぶりに見るネピアは変わっていた。

外見が全身を覆う黒のローブに同色のとがったつば広の帽子をかぶった、闇と同化しそうなファッションになってるのは別にいい。このゲームは装備がキャラのグラフィックに反映されるからな。カナメも今は鉄の胸当てに皮のズボンを身につけてるし。

カナメが身につけてるのはは今のレベルで最高の防御力になる装備だが、ネピアのはどうだろう。統一感はあるから趣味も含まれるかもしれないが。

それよりも俺をびっくりさせたのはそのレベル。

『表示でもバグってる？』

ネピアはきよとした顔でハムスターのように小首を傾げる。画面の向こうで操作している本人より表現は豊かかもしれない。

『いや、そうじゃなくて、やけに高くないか？』

『普通。カナメの方が低すぎだと思う』

そりゃ、ここ最近クエストしかやってなかったし、一日二時間程度だったからレベルは6ではあるが。

『でも、18って高くないか？』

伊織は休みなく登校してきていたし、そこまでプレイ時間はないはずだが。

『普通だと思うけど』

『一日何時間プレイしてるんだ？』

『多いときは10時間』

『多すぎるだろ！』

伊織の普通の基準が分からない。

寄り道せず帰宅してすぐに始めたとしても、日付が変わってる時間がないんだが。

『飯はちゃんと食べてるんだろうな』

『食べてる。狩り中は単調だし』

『……飯は行儀よく食べろよ。風呂は？』

『変態なのかカナメは。……あ、そういえばそうだったっけ』

『何でいきなり変態扱い！？　そういえばって俺が過去になにかし

た風に言うな』

『私が入る時間を聞き出して、その時間にカナメも来るつもりだろうし。壁を挟んだ向こう側にいる同級生の裸を想像して興奮する計画かと先読みして返した』

来るつもりというのは近所の銭湯のことだろう。伊織の部屋には風呂はなかったから、そこを利用しているの考えるのが自然だ。

俺も幼少の頃行つてた時があつたな。誤解がないように言つておくが、親父といつしよだったし男湯しか入ったことはない。

……つて、んなことはどうでもいい。誤りだらけの先読みをしないでくれ。

『したじゃないか。私の部屋に上がり込んで下着を見つけて、匂いを嗅いで、ハアハアした』

『いや、確かに下着を見つけたりはしたが、とんでもない尾ビレと背ビレを付けないでくれ。あと、わざわざ想像しに行くわけがないだろ』

『……部屋で想像するの？』

『しねえよ。風呂に入ってるのか聞いたただけだ。それだけプレイしてるから気になったんだよ』

『二日に一回は行つてる。今日はもう行つてきた。残念だったな』
『いや、何が残念だよ。伊織の脳内にある人物表の俺の項に変態だと書かれているなら今すぐ消してくれ。代わりに紳士とでも書い
け。』

『それで十時間つて……いつ寝てんだよ』

『三時』

『睡眠時間少なすぎだろ』

『五時間あれば十分。けど、眠い時は早めに寝るようにしてる』

八時起きか。すぐに出たとして、伊織の部屋からだと始業チャイム五分钟前といった時間だろう。そっぴや伊織はいつもギリギリの時間にのっそりと登校してきてたな。

布団から出て制服に着替えて、と考えたらそうなるか。

『まあ、体には気をつけろよ』

『カナメに心配される筋合いはないけど、気をつける』

お、意外に素直。

『それにしても、十時間やって18だと俺が追いつくのは相当先になりそうだな』

単純計算だと五倍の日にちが必要ってことになる。

『メインの方を主に使ってたから、ネピアは一日三時間くらいしか育ててないし。効率の違い』

『効率って、そんないいやり方があるのか？』

『経験値のいいクエスト回したり、人の少ない狩り場で無駄なく狩り続けたり。他にもいいやり方はあるけど、私はそうしてた』

『他にもという？』

『パーティがいいんじゃない。場所が悪いか、役立たずが多いと、ソロより稼ぎにくかったりするみたいだけど』

『役立たずか……』

ただ剣で攻撃するだけの俺はそちら側に分類されるんだろうか。

『自覚してるみたいだけど、カナメはそんなことないと思う。パーティで役立たずというのは、会話ばかりだったり、回復アイテムを持ってなかったり、最低限のことが出来てない奴のこと。カナメは役立たずというより実力不足』

否定できないのが悔しい。クエスト中、他プレイヤーの様子を窺ったりしていたが、動きにキレがある戦い方をしてるプレイヤーもいたし。

『伊織もパーティ組んだりして上げてたりしてたのか？』

見ず知らずの他人と組んだら伊織はどんな接し方をするか気になった。俺に対するようになじるのか、はたまた借りてきた猫のように黙っているのか。

校内だと後者だし、ゲーム内でも多分そうだろう。他人に対してまで『使えない』『お前はバカなのか？』とか言ってたら、パーティから追い出されるだろうし。

『野良パーティ入ったのは以前に何回かしかない。今は殆どソロ』

『ソロ？ 三刀流の使い手のことか？』

俺が聞くと会話がしばし途絶えた。

『パーティに参加せずに一人で行動すること』

『一人か。誰かと組んだ方がいいもんなんじゃないのか？』

それが多人数参加型RPGの魅力と伊織からかりたPCゲーム雑誌にも書いてあった。

『利点もあるし欠点もある。利点は、他人に気を使う必要が少ない、アイテム分配しなくていい、カナメと会話しなくていい、とかだ。欠点は、効率の悪さになるけどこれはジョブと育て方によって変わる。……あとは他のプレイヤーと接する機会が極端に減るけど、これを欠点にするかは人による』

ハハハ……今も迷惑だつたりするのかな？

『パーティはどうなんだ？』

『ソロの逆。カナメは少しは脳味噌を働かせないと腐れると思う』

日々の授業で無理矢理働かせてるから、腐ることはないと思うが、それに最近はゲーム知識まで入れられてるし、フル回転状態だ。

『つてことは、手っ取り早くレベルを上げるにはパーティがいいんだな』

『そう。カナメのレベルなら狩り場は“レシア洞窟B2F”がいいんじゃない』

レシア洞窟か。入ったことはないがクエストの途中に見かけたことはある。

『じゃ、今日はそのに行くか』

と、カナメはきびすを返し意気揚々と歩きだそうとすると、

『ま、早く私に追いつくことだな。頑張つて』

振り返ると、ネピアは立ち尽くして暇そうに欠伸をしていた。

『いつしよに行かないのか？』

『PT内でレベル差があると獲得経験値が減るから私が加わると効率が悪くなる。それにPTはあまり好きじゃない』

だったら仕方ないのかもしれないが、後者の理由の方が本音に近いだろう。

『そっか。まあ、なるだけ早く追い付くように頑張るから、その時はいっしょに組んでくれるか?』

『考えなくもない』

『じゃあ行ってくる』

手を振ってみたが、ネピアは応えることなく光に包まれ消失した。ログアウトかメインキャラに変更したか。

素っ気ない反応だったが、ネピアのレベルに近づいたら組んでくれるかもしれないってことか。

伊織が俺に戦士を進めた時に言ったことはしっかりと覚えている。早いところ追い付いて、ネピアの盾になってやらないとな。

俺は部屋にある時計を一瞥し、急いで狩り場へと向かった。

このゲームに限ったことではじゃないらしいが、MMORPGにおけるパーティの組み方というのはおおまかに分けると二種類ある。知り合いを誘って組むか、同じ目的を持つ他人と組むか。

後者のことを野良パーティと呼ぶらしい。

俺はその野良パーティに加わるために現在レシア洞窟の1Fにいる。同じくレベルを上げる目的を持つ人達がいればいいがと思いつながら。

初めて入ったレシア洞窟のモンスターは、レベルの割に手強かった。遭遇したらあちらから攻撃してきたため、応戦してみたが回復アイテムを二個消費してしまった。

その分、倒して得られた経験値は、草原にいた同レベルの敵より高くはあったが、一人で狩るのは危険だし、何よりは回復アイテム

の消耗が激しく、金銭面でも効率がいいとは言えなかった。

モンスターをいなしつつB2Fへと下りる。ゲームだから当然なのかもしれないが、光が届かない場所であるはずなのに明るかった。B1への階段から離れ洞窟の奥へと進んでいく。

ここまですれ違う人は見かけたが、誰もが単独行動でパーティを組んでる人はいなかったが、ここにパーティはあるんだろうか。

野良パーティは狩り場で結成されることが多いと聞く。街で募集していることもあるらしいが、それは希少でこちらのパターンが圧倒的とのことだ。

経験値の高い敵がいる狩り場は人も多く、自然とパーティが出来ていくものらしい。

「いた！」

集団のプレイヤーを見つけて俺は画面前でつい声を出してしまう。隣室ではひよりがもう寝てるだろうから、なるべく静かにプレイするように心がけてたが、気分が高揚してしまっていた。

カナメは岩影に隠れるようにして、パーティらしき集団の人数を数えていく。

どうやら五人のようだ。一つのパーティの最大人数は七人だから空きはあるようだ。

カナメはその集団へと駆け寄った。
緊張した手付きで文字を入力する。

『あの、パーティに参加したいんですが』

そう言くと、複数のモンスターに魔法や剣で攻撃している中、一人のプレイヤーがこちらへと近寄ってきた。

『いいですよ』

と笑顔を浮かべる動作をして、パーティに誘ってくれた。

『よろしく願います』

以前、伊織に教わった通りに礼儀よく述べると、口々に『よろしく』と返ってきた。

多人数での狩りは効率がよく、気のいい人が多く談笑を交わしているうちに時間を忘れて、やめるころには明日に響く時刻になってしまっていたが、数時間で三レベルも上げることができたのだった。

第十一話『はじめてのPK』

「ひどいな……」

唐突の出来事にしばし慄然と画面眺めていた俺が、ようやく漏れた言葉がこれだ。

カナメが広大な砂漠でうつ伏せに倒れて熱砂を嚙んでいる。

迷ったあげく水をくれと嘆き苦しんだ成れの果てではなく、砂漠の村アクアンの入り口が画面端に映り、まさに目と鼻の先なのだが、もうカナメには起きあがる力はない。

HPが尽き果ててしまっているから。

これはモンスターにやられたという訳じゃない。この辺りのモンスターに苦戦はしなかったし、こちらから攻撃しない限り安全なモンスターだけだった。

じゃ、誰にやられたかって？

『千人切りのキャベツ』に俺は倒された。

通り名つばい名前を付けてるそいつに。キャベツなら千切りじゃないのか！？と名前にツツコンでる間のあっという間の出来事だった。

さて、少し振り返ってみようか。

またセントラルからここまで来るのは骨が折れる。一旦休息が必要だ。

一週間ほど狩りに費やしてレベル十五になったカナメは、十五レベルになると受諾できるクエストに挑戦することにした。

このクエストはクリア時に入手できる経験値が高く、三レベルは上がると伊織からのアドバイスにより受けた次第だ。

ネピアのレベルには変化はなく、このクエストを終えればレベルの差異はほぼなくなるに等しい。伊織は何も言わないが、上げずに待つていてくれるのは分かる。

そのクエストの内容は、いわゆるお使いクエストで依頼者から渡された小包を、指定された人物に届けるというものだった。

これだけの説明だと一見簡単に思えるだろうが、その人物の下に至るまでの道程が困難を極める。

一つの山を超えるだけなのだが、デスマウンテンと名付けられるだけあって、命が幾つあっても足りないくらいに超えるのが厳しい。その理由としてモンスターの凶悪さが上げられる。レベルは平均20とさほど差はないのだが、その強さはレベル50に相当するとは伊織情報。

そんなモンスターが幅の狭い山道に溢れているため、避けるのは不可能に近い。

モンスターが強いわりに得られる経験値は低く割り合わないため、好き好んで狩りに来るプレイヤーも皆無で、沸き時間の隙間を狙って通り抜けることもできない。

こんなクエストを十五から受けれるなんて、バランスがおかしいと愚痴りたくもなるが、これは多数のプレイヤーが各自意志を持って動き回るMMORPGである。

自分一人では無理ならば、誰かと協力すればいい。

レベルの高いプレイヤーにモンスター倒してもらいながら進むという方法が、低レベルでクリアするには一般的らしい。

その相手は知り合いに頼むか、街などで全体チャット（同マップにいる全員に届く）を用いて探したりすることもできる。無償の手助けをしてくれるプレイヤーもわりといるらしい。

幸運にも俺の知り合いに頼りになるであろう人がいたため、協力を要請すると、

『自分でやれアホ』

『いや、無理だって言ったのはネピアだろ』

『困難とは言ったが無理だとは言ってない。もしかしてカナメは漢字が読めないのか？ 困難だ。百回くらい書いて覚えたどうだ？』

『こんなん読めるに決まってるだろ』

…… やや間があつて、

『色々とかナメが可哀想だから、一つアドバイスしてやる——』

何故、哀れられたかは分からないが、アドバイスを参考に俺はデスマウンテンに向かった。他の人に協力を求める手もあったが、あ言われては意地でも一人で超えるという気概だ。

デスマウンテンは登山道と洞窟によって構成されている。少し登っては洞窟に入り、また少し登っては洞窟——と複雑な造りになっているが、山の向こう側へ抜けるだけならば迷うほどではない。少し登ると早速モンスターが視界に入った。二人分くらいの幅しかない山道を活発に動き回っている。

無理を承知で端を伝って通り抜けようとしてみた。万が一にも発見されないかもしれない。

…… そう甘い話はなく。カナメを視界に捉えたモンスターは、ずっとこちらに近寄るとカマキリのような腕を振るって攻撃してきた。カナメは瞬時にモンスターに体を向ける。

ガキンと高い音が響いた。

「よし」

俺は片手で拳を握り小さくガッツポーズをした。そして、カナメはそそくさとモンスターが攻撃の硬直時間で立ち止まってる間に距離を離す。ダメージはない。

『カナメは剣士だろ』

ネピアの一言アドバイスはこうだった。

『一介の高校生だが』

『そのことをよく考えてみたら』

バトル漫画の主人公の師匠のような断片的なアドバイスを残してネピアは消えた。

ジョブレベルが十五になるとクラスチェンジが可能で、以前にしてみらった育成指南通りに剣士を選んだ。

戦士の時より全体的な能力が底上げされ、中でも防御力と体力は見違える数値になった。装備可能な防具も増えて、盾もその一つだ。片手が塞がるため武器は片手用しか装備できなくなり、与えるダメージはやや下がるが、それを補うメリットは当然ある。

盾は防御力が上がるほかに“正面からの攻撃を一定確率で防ぐ”効果がある。その確率は、盾の種類やスキルに依存し、この時は十五パーセントだった。

要するに盾で攻撃を防ぎながら、駆け抜けてくという強行突破作戦である。

もちろん。全ての攻撃を盾で防げるわけはなく、十五パーセントではむしろ運良く防げたら御の字という意味合いが強い。

なので、殆どの攻撃は当たっているのだが、ここでも剣士というのが幸いする。

戦士から派生していく剣士系のジョブはパラディンに次いで防御力が高い。そのためこのモンスターの攻撃でもHPを半分程度減らされる程度で済む。

減ったHPを回復アイテムですぐに補い、モンスターを振りきっていくのが主な方法だ。

ちなみに防御力は、物理と魔法に分かれている。物理は殴られる、斬られる、撃たれるなどの武器や体術による攻撃のダメージで、魔法は火球や雷などの魔法によるダメージを指す（そのままだが）。

剣士は物理防御に優れる反面、魔法防御は低いのだが、デスマウンテンに出現するモンスターは物理攻撃しかしてこない。

以上の理由から剣士は一人でこのクエストを遂行するのに適しているといえるだろう。

「ふう」

デスマウンテンを抜けた先は砂漠が広がっていた。

アイテム欄いっぱいにあった回復アイテムは底をつき掛け、気の休まる暇はなく強く握っていたコントローラーは手汗がびっしょりと付いている。

周囲の安全を確認し、カナタを地面に座らせて体力を自然回復させてる間に、俺は手汗を拭い緊張で堅くなった体をほぐすように伸びをする。

再びコントローラーを握り、一路砂漠の街アクアンへとカナメはひた走る。

モンスターにも襲われることなく、マラソンランナーのようにひたすら砂漠を横断し、ようやく町の入り口までもう少しというところで、

「ぶっ……ゲホゲホッ！」

目を疑うような出来事に俺は飲んでいたコーヒーで咽せた。少し机が汚れたくらいで済んだが、それよりも俺の視線はパソコンの画面に向いた。

背後に突然影が射し怪訝に思った瞬間、俺のHPは一気に半分以下に削られていたのだ。

愕然としながらも、振り向いて背後を見た俺の行動は今にして思えば正しかったとは言いかねる。無視して町へと駆け込めば助かったかもしれない。が、この時の俺に冷静な思考と知識はなかった。

目の前に映ったのは、身の丈はある柄の先に、薪どころか丸太を叩き割るために適したような鈍色の大きな刃が付いている斧。

それを両手でヨッコラシヨと持ち上げているのは分厚い鎧に身を

包んだプレイヤーで、キャラ名は――

「千人じゃなくて千切りにしろよ!」

操作を忘れツツコミを入れてる間にカナメへと斧は振り下ろされた。

『ざまあwww雑魚がwww』

ネーミングセンスのない千人切りはそんな言葉を吐き捨て、カナメを踏みつけながら町へと入っていった。

これは罵倒されてるのか? wって何だ?

以上。こうしてクエスト達成目前でカナメは力尽きたのである。

「ふう……」

回想して気持ちを切り替えようとしたが、上手く行かなかったようだ。

消費した回復アイテムを補充して再度の山越えを考えるだけで気が滅入る。

ここでやめてもよかったが、就寝時間にはまだ早い時間だ。俺は倒れたままチャットを飛ばす。

『伊織、今いいか?』

ゲーム内だとキャラ名で呼び合うのが取り決めだが、間違っではない。ネピアはあくまでもサブキャラの名前で、メインキャラの名前が伊織なのである。

『なに』

まず素っ気ない返答がきて、

『PKにでもあった?』

訳の分からないことを聞いてきた。

俺は首を傾げると、一つ浮かんだ。

『ああ、2010年のワールドカップは惜しかったよな』

『……何の話？』

『もしかして見てないのか？』

スポーツ全般にあまり興味なさそうだな。こないだの体育でやったソフトボールでも、バットを持った人形のように突っ立ってるだけで見逃し三振してたし。

だが、体操着姿でよりスタイルが強調された伊織に、俺含む男子の視線を釘付けにはしていた。こういう時だけ注目しやがってと、目潰しをくれたくはなかったが。

『カナメのつまらないボケを意図的にスルー出来なかったのは悔しいけど、おおかたカナメは砂漠で別のプレイヤーに倒された。違う？』

『何故それを』

倒されたら視点が真上からに固定されるから周囲の様子は僅かしか窺えないが、視界の外から伊織が倒れるカナメを見て嘲笑してんじゃないのかと疑いたくなる。

『あの辺りはPKが出ると掲示板で見たことあるから。そのクエストで訪れるプレイヤーを狙う悪趣味なのが』

『つまり、あのキャベツがPKってやつなのか』

『……キャベツ？ 名前が赤かったらそう』

記憶を探る。一瞬の出来事だったがツツコみたくなるくらいに印象的な名前だったからよく覚えている。

『ああ。赤かったな』

『PKはプレイヤー・キラーの略。プレイヤーを意図的に倒すプレイヤーのこと』

まだ説明を求めてなかったが、聞くつもりだったのを先読みされたか。やるな。

『意図的って、マナーとしてどうなんだ……』

わざと攻撃されて良い気分になる奴なんざいないだろう。

『あんまり好まれてはいないけど、システムとして運営も認めてる。』

PKもプレイスタイルの一種」

『随分と嫌なプレイスタイルだな。ただの嫌がらせだし』

町まで一歩手前までたどり着いたプレイヤーを切り倒すなんて、伊織の言うとおり趣味が悪すぎる。

『ああいうのはごく一部。PKは悪役プレイだけど、不快にさせないよう配慮してる人もいるし。それにPKできるマップは限られてる。大きな街の周辺は不可能だし。カナメのいる場所は町から出てすぐがPK可能マップの珍しい例だけど』

『配慮するくらいなら、PKしなければいいんじゃないのか』

『その辺りはプレイスタイルの違いだから理由は本人に聞いたら？一応、PKにもメリットはあるけど。倒したプレイヤーからアイテムを奪えたりとか』

『俺は何も奪われなかったが』

『奪う価値のあるアイテムがなかったからだと思う。それに今回の奪うのが目的じゃなかっただろうし。低レベルプレイヤーの邪魔をしてストレス解消するクズみたいだし。最低な部類。垢BANされればいい』

酷いこと言われてるなキャベツは。けど、こっちは被害者だから同情はしかねる。垢BANの意味は分かんが。

『メリットは分かったが、デメリットはあるのか？』

『そっちの方が多い。分かり易くいうと、犯罪者という扱いになって、色々と制限される。ほとんどの街に入れなくなったりとか』

『それはキツそうだな』

街に様々施設が揃ってるし、それらが利用不可能になるのは重いペナルティだ。

『これは僕の推察ですが、もしかするとPKにでも襲われましたか？』

伊織との会話途中に、不意に第三者の言葉がチャットウィンドウに表れる。白文字だから、カナメの近くにいるであろうプレイヤー

のものだ。画面内には姿は映ってないが。

『誰かに話しかけられた。すまんが、話は一旦中断で』

まず伊織に伝える。電話中に来客があつた気分だ。

『そう』

伊織の返答を見てから、俺は近くにいてであろうプレイヤーにチャットを返す。

『そうみたいです』

『それは災難でしたね。よかったら蘇生しましょうか？』

『え？』

蘇生ってどういうことだ。

『HPが無くなったプレイヤーを復活させる魔法があるんです。デスペナはありますが、その場で復活することが出来ますよ』

俺の浮かんだ疑問を読んだかのように、シヨウ（チャット欄で名前に分かる）は説明してくれた。

『できたら、お願いします』

そう言つと、カナメを白い光が包みこみHPが少しだけ回復し、カナメは起きあがつた。

復活したことで視点を動かすことができるようになり、周囲を探ると、シヨウと頭上に名前があるプレイヤーを見つけた。

金髪に端正な顔立ち。白銀の鎧を着ており水色なマントが風にはためいている。見るからにレベルの高そうなキャラだ。

『ありがとうございます』

助けてもらい礼を述べるのは社会でもゲーム内でも基本のマナーだ。

『いえいえ。じゃ、僕はこれで』

回復魔法をカナメに使ってくれてから、シヨウは村へと入っていった。

PKにあつたばかりだったからか、俺はいい人もいるんだなと感銘を受けた。またPKに遭遇しないと限らないし、追いかけるように村へと入った。

『辻レイズか。運が良い』

再び伊織へと会話をし、起きた出来事を伝えるとそう言った。

『辻レイズ？』

『通りすがりに回復や補助をかけること。感謝されたい人が自己満足でよくしたりしてる。ちなみにこのゲームでの蘇生魔法の名称はレイズじゃないけど、浸透してる名称だからそう呼ぶ人が多い』

『そうなのか。ところでパラディンって蘇生魔法も覚えるのか？』

先ほど蘇生してくれた人のジョブがパラディンのようだった。名前の横のアイコンで知ることが出来るのだが、白い盾であったから、恐らくはそうに違いない。

『パラディンは覚えない。蘇生魔法はハイクレリック……司祭からの派生……でジョブレベルが50必要』

ということはハイクレリックを育ててからパラディンになったのか。時間がかかりそうだ。俺もパラディンとしていずれば覚えたいもんだな。

サツと登場して蘇生して立ち去る様は、実に格好良かったしな。

『カナメ、辻レイズした人の名前はわかるか？』

何でそんなことを聞くのかは分からないが、答えても問題はないだろう。

『シヨウ』

『それだけ？ 余計な記号は付いてなかった？』

『ああ。確かにシヨウだけだった』

そう返すと、伊織からの言葉はすぐには返ってこなかった。いつも早打ちガンマンがごとく余計な罵倒を添えて即座に打ち返してくるのだが。

俺は首を傾げてから、チャットウィンドウをさかのぼる。一定の量までなら過去の会話が記録されており、恩人であるシヨウとのやり取りもまだ残っていた。間違いなく、シヨウ。それがあの人の名だ。

『カナメは運がいい』

間を置いて伊織からまず来たのは二度目の『運がいい』か。今日の朝にテレビでやってた星座占いは最下位だったんだが。

『そりゃあ、もう一度ここまで来る手間が省けたのは運が良いとは思うが』

『【白騎士】シヨウ。CROSS・FANTASIAで有名なプレイヤーの一人』

『有名？ 芸能人が操作してるのか？』

『違う。強いキャラとして有名。少し考えたら分かると思うけど』
『そうなのか』

『パラディンをメインとしてるキャラでは最強クラスと言われてる。プレミアム武器“エクスカリバー”をずっと所持し続けてるみたい』
『プレミアム武器って何だ？』

『ゲーム内に一つしか存在しない武器。性能はトップクラス。手に入れるには持ち主から貰うか、PKか決闘で奪い取るしかない』

『決闘？』

『……そのうち分かる』

説明が面倒くさくなったんだな。後で検索サイトを用いて自分で調べるか。

『俺はそんなプレイヤーに助けてもらってたのか』

十万人（サーバー別に分けられるから正確にはもっと少ないが）の中からそんな凄そうな人に助けられたのは確かに運がいいかもしれない。

『俺も、あんなパラディンになりたいもんだな』

颯爽と現れ助けて、名前も告げずに去る（頭上に表示されてるが）そんなパラディンを俺は目指したい。

『ま、有名なのはゲーム内だけで、現実はどうなのかは知らないけど』

『え？』

『強いのはゲームにその分時間を割いているってことだし。リアル

な時間を犠牲にしてるから、多分友達は少ないと思う』

なんか、あこがれのスターの私生活が暴かれたような気分になった。

『そうとは限らないだろ。上手く両立してるかもしれないじゃないか』

『私より総合レベル高いみたいだし、あり得ないな』

妙に納得できる理由だったから閉口するしかない。

『ところで、クエストは終わった？』

『今報告するところだ』

今日中の達成は諦めてたが、シヨウのおかげで本当に助かった。

『そう。じゃ、やっと私に追い付くのか』

『ああ。やっとパーティ組めるな』

『考えとく』

『そか。今日はクエスト終らせたらやめるけど、今度頼む』

『ところでカナメ』

『なんだ？』

『私は友達が少ない』

俺はきよとなつた。伊織の友達は多分俺だけ（坂本はどうだろう）なのは知っているが、自虐だろうか。何故今そんなことを言うんだ？

『略して、はがな——』

俺は慌ててチャットウィンドウ閉じた。直感が見るな、と。そう告げていた。

第十二話『伊織と休日』

六月のとある日曜日の午後。

からつと晴れた暖かい日射しの下、俺は大通りを歩いている。

大型デパートを始めとして、大小様々な店が建ち並んでおり、人通りも多い。以前、伊織と訪れた喫茶店もこの通りにある。

何故、俺が来ているかという理由は特にない。しいて挙げるならば単なる息抜きだ。ここの所オンラインゲームに没頭しすぎてたからな。あんなに長時間、長期間机に向かっていたことはないくらいに。

現実の俺より、ゲーム内のカナメの方が活動しているといっても間違いじゃない。

今日も午前中の家事を終えてからは、カナメは画面内で元気に動き回っていた。

そして昼食後、天気もいいしとここに来たわけだ。坂本を誘おうとしたのだが、今日は予定があるとのこと、今は一人である。

他に誘えるような相手がいないのは悲しくはあるが、心から気を許せる友人がいるだけでも俺は幸せなのだと思う。

世の中には一人もいない人だって多いのだから。

——伊織は休日は何をしているんだろうか。

ふとそんなことが気になった。

ゲームが友達とか平然と言つてのけてたが、本当に今までいたことがなかったのかは俺には分からない。

いないと外に出ることが少なくなるのは自身の経験から知ってるが、昔の伊織は何をしていたのか——俺は家事だったが——テレビゲームか？

ゲームが楽しめる物だとは思えるようになったが、それはそれでうら寂しいものだ。友達と顔を合わせて他愛もない会話をするだけでも、趣味とはまた違う楽しさがある。

俺は伊織にその楽しさを分らせてあげたい。無用なお節介かもしれないが、そうしてあげたかった。単に俺が伊織と話したいというのもあるのだが。

思い立ったら吉田とジーンズのポケットから携帯を取り出して、伊織に電話を掛けようとして、

「あ」

近くの本屋の自動ドアが開く音に、何となくそちらに顔を向けると、噂をすればなんとやら（少し違うか）。

「……………」

本屋から出てきた人物は俺と視線が合ったにも関わらず、無視するように横を通り過ぎようとする。

「伊織」

肩を掴んで呼び止めると、伊織は立ち止まり肩に乗せられた手を煩わしそうに退けてから、体を向ける。

「何か用？」

「ああ……………」

願ってもない鉢合わせだったため、俺は咄嗟に言葉が選べずにそう漏らしながら、言葉を探る。

それにしても伊織の私服姿は初めて見る。いや、部屋着であろうジャージ姿は見たことはあるが、外出時の格好は見たことはなかった。

黒を基調としたファッション。下は膝上丈のスカートで、目映いくらいに白い脚がスラリと伸びている。

「似合ってるな」

思わずそんな言葉が漏れた。

伊織は自分の服装を確認するように視線を下げてから、俺を細めた目で見て、

「……………ナンパ？」

「何でそうなるんだ……………」

「そう思ったから」

答えになつてない。

「まあ、頑張つて。冗談さえ言わなければ上手くいく可能性はあると思う」

そんなアドバイスを残して伊織はきびすを返そうとする。

「いや、だからナンパじゃないから。お前に会いたかつたんだ」

驚いたように振り向いた伊織は、ほんの少し顔を赤く染めていた。
「かなめ……恥ずかしくないのか？ それとも冗談？」

「あ……」

否定するために慌てて発した言葉だったが、今にして思うととても恥ずかしい気がしてきた。恋愛ドラマのワンシーンかよ。

俺は周囲に首を回し、特にこちらを見ている人がいないのを確認してから、

「あ、いや、違う。少し言葉の選択を間違えたただけだ」

「もつとクサイことを言うつもりだったのか？」

「んなわけあるか！」

「じゃあ冗談か。悪いけど、笑えない、ごめん。すいません」

淡々と謝られた。しかも三回も。

「いや、冗談でもなくて、伊織に用があつて、大した用つてほどでもなくて……」

意味のない手振りを交えながら言葉を探るが、上手いのが見つからない。

「ハツキリして。リアルであやしいひかりでも浴びて混乱でもしてるのか？」

僅かに顔をしかめて伊織は言う。

電話して俺は何て言おうとしたんだっけか……ばつたりと会ったからか脳から言葉がこぼれ落ちてしまっていたみたいだ。

「あのさ、今暇か？」

伊織は少し反応に困つたように黙っていたが、
「そう見える？」

用事を済ました後でそう見えなくもないといった感じた。

「よかつたら、今から遊ばないか？」

意外にも伊織は俺の誘いを受けてくれた。ただし、一つの条件を提示されたが。

場所は喫茶店。以前に伊織と来たことがあると言えはおのずと一つに絞られるから、これ以上の説明は不用だろう。

俺と向かい合って座る伊織はというと、チョコレートパフェを、美味しいのか不味いのか表情からは窺い知ることはできないが、黙々とスプーンで口に運んでいる。

『じゃ、パフェでも奢って』

というのが伊織が出した条件だ。

いつ満たせばいいのかは決められてなかったが、梅雨の中休みで久方ぶりの出番に張り切っているらしき太陽の下で話すよりは、涼みながらのがいいと、まずそうすることにした。

小遣いが入ったから、またドカパフェを頼まれても任せるとばかりに支払うつもりだったが、普通サイズのパフェに少し拍子抜けした。さすがにあのサイズを一ヶ月も経たないうちにもう一度平らげることはいないか。

俺は角砂糖を三つ溶かしたコーヒーをすすってから、

「パフェ、好きなのか？」

沈黙に耐えかねてようやく出た言葉がこれだ。この前はジョブを選ぶという話題があったが、今回は具体的な話題はない。

「……まあ」

とだけ返して伊織はまたパフェを味わうことに集中する。

うん。話題が続かない。ひよりや坂本はあちらから話題を振ってくれるタイプだから、俺はそれを返すだけで困ることはなかったが、伊織みたいなタイプとはどう付き合っていけばいいのかわからん。

ああ、見栄張りしました。

そもそも人付き合いがそれ以外にほとんどありませんでした。

「あ、本屋で何を買ったんだ？」

俺は視線をさまよわせ話題を探した結果、伊織の隣に置かれた本屋の袋を見て聞いた。

「ゲーム雑誌」

淡々と伊織は答えた。

「オンラインゲームのことでも載ってるのか？」

「多少は。家庭用ゲームの情報を中心だけど」

「家庭用？ オンラインとは違うのか？」

「多少は。パソコンじゃなく、専用のゲーム機用に販売しているソフトのこと」

「セガ。ターンとかか？」

「かなめはズレてるな」

伊織はどこか冷めたような瞳を俺に向ける。カウンター席の中年男性が頭に手をやっているのが目に入ったが、俺の何がズレてるのかは見当が付かない。

「そういうのって、テレビがないとできないんじゃないのか？」

伊織の部屋には地デジ化も関係なくテレビはなかった。

「パソコンの液晶モニターに繋がればできるけど、今は携帯ゲーム機しかない」

「そうなのか。オンラインゲーム以外もやってたりしてるのか？」

「そういえば、ノートパソコンをかなりコンパクトにしたような機器があった気がする。」

「少しは」

答えて伊織は液体になりかかっているパフェの残りを、ジュースを飲むように口へと流し込んで、空になったグラスを置き、

「で、どこに行くの？」

糖分多めのコーヒーで脳を活発に働かせてそのことを考えていた。どこに行けば伊織が楽しめそうかと思いを重ねた結果、

「ゲーセンとかはどうだ？」

俺が伊織の趣味で知ってるのは、ゲームが好きしかなく、ここしか思い浮かばなかった。

「ゲーセン……」

俯き加減で伊織はつぶやく。

「駄目、だったか？」

伊織は顔を上げて小さく首を振り、

「ううん。それで構わない」

店を出て、俺たちは大通りにあるゲームセンターで遊んだ。

俺は過去に二回程しか来たことはないと言ったなら、伊織は初めてだと答えた。

相変わらず感情を表情に出してはいなかったが、行動はデパートの屋上コーナーではしゃぐ子供のように、次々とゲームをプレイして、両替した百円を湯水のように消費していた。

伊織のゲームの腕前は凄いらしく、様々なゲームでハイスコアを更新していた。

坂本が言うには、ここは腕に覚えがあるゲーマーも訪れていて、スコアを塗り替えるのは難しいと言っていた。

ワンコインで二人プレイ可能なゲームでは、伊織と並んでプレイしたが俺は散々たる結果で、その度に伊織に鼻で笑われたが、俺にはさしたる自尊心もないし、伊織が満足できたならよしとしよう。

中でも格闘ゲームはギャラリーができるくらいに注目を集めていた。

俺には何がどう凄いのか分からなかったが、ギャラリーがヒソヒソと話してたのを聞く限りじゃ、ゲーセンのナンバー2を倒したとかなんとか。まあ、とにかく上手いらしい。

そして、ゲームを終えた伊織は注目されたことに気付かなかったらしく、顔を伏せながら俺へと早足で寄ってきた。頬は少し赤く

染まっただけで、俺は可愛い一面を見てしまったと思ったが口には出さなかった。

「そろそろ帰るか？」

ゲームショップから出て俺は携帯で時刻を確認しながらそう口にする。

ゲーセンの後、適当にブラブラとして時刻は五時前となっていた。「そう」

伊織が言ったのを聞いて歩きですが、伊織が来る気配がないのを感じて後ろを振り返る。

「伊織？」

俺とは反対方向に歩いている伊織へと駆け寄る。帰るなら途中まで道はいつしよのはずだ。

「他にどこか寄りたい場所でもあったのか？」

「まあ」

伊織は足を止めることなく、短く言った。

「じゃ、俺も付き合おうよ」

「別にいい」

淡々と伊織は断る。

「俺が行くとマズい場所なのか？」

下着売り場とかくらいしか俺の貧困な発想力では思い浮かばないが。

「そうじゃないけど、時間掛かると思う。多分」

「それなら気にしなくてもいい」夕飯の仕度ならひよりに任せられるし「どこに行くんだ？」

俺が聞くと伊織は立ち止まる。信号が赤だからだが。伊織は上目遣いを俺へと向け、躊躇うように口を小さく開いては閉じるのを繰り返してから、

「……笑わない？」

睨むような細めた目つきをしながら伊織は聞いてくる。伊織には

珍しく不安がかいま見える表情だ。

「笑わない」

俺は顔を引き締めて強く言った。

伊織は息を整えてから、ボソリと、

「……携帯ショップ」

驚きの声が出そうになったのを抑え、

「携帯買うのか？」

「私が持つのは変だと言いたいのか？」

そう言う伊織の声にいつもの調子はなく、どこか弱々しかった。

「いや、全然。それより、どこの機種にするつもりなんだ？」

「まだ決めてない」

信号が青になり、俺は再び歩き出すと、少し遅れて伊織も並ぶ。

周辺には三大携帯会社のショップが揃っていて、顧客を獲得しようとしてのぎを削っている。

「だったら、あそこはどうだ？」

と、広い道路を挟んで向こう側にある携帯ショップを指さす。伊織は指した方向を見る。

「……友達紹介キャンペーン」

店先に立てられたのぼりに書かれているカラフルな文を伊織は独り言のように読んだ。

「そうだ。同じ携帯会社の機種を使っている友達を連れて新規契約を申し込むと、一万円のキャッシュバック。学生の場合は五千円の機種代金割り引き。更に指定した五人までなら通話・メール料金が50パーセントオフ！ 今ならお得。らしい」

「かなめは業者の営業マンでもやってるのか？」
疑うような瞳を向ける伊織。

「いや、あの店のガラスドアの張り紙をよく見てたから覚えてただけだ。暇だったから」

「寂しいと思わない？」

「……まあ、な」

俺は顔を逸らす、否定をできないのが悲しい。スーパーのチラシ以外にも割り引きという単語にはつい目が止まってしまうしな。

「つまり、一万五千円得なのか。……指定五人もいないけど。必要ないオポジションだ」

伊織の言葉に俺は同意する。

「そんなに頻繁にメールや電話をする相手もないしな。一応、家族と坂本で四人登録してるが」

「私は……誰もいないか」

「家族とかいるだろ」

「じゃあ、とりあえずそうしとく」

「あと、誰かいらないか？」

俺は期待を込めて聞く。伊織の家族は良心に弟だと言ってたから、あと二人分はある。ほら、ゲームのことで連絡取れたらいいなという相手がいるだろ。

伊織は少し考えるように俯いてから、

「いない」

「いや、俺は!？」

思わず抗議するように声を上げてしまった。図々しかったか。

「友達紹介キャンペーンじゃなかったの？ 紹介した……友達……は、自動でそうなるものなんじゃないのか」

「あ、そうか」

うつかり失念していた。あらぬ心配を抱いてしまっていたな。

「……安く済むから。仕方なくだけど」

早口で言い、伊織は歩道橋の足早に階段を上がっていく。引つかかるような言い方だが、これが伊織だからそれほど気にはならない。「そうか」

俺は緩んだ口元を引き締めてから伊織を追った。

第十三話『目標、決まりました』

見上げるほどの大きさをした白銀の甲冑が、振りかぶった鉄塊のような鈍色の幅広刃を持つ剣を勢いよく垂直に振り下ろしカナメを切り裂いた。

カナメは「グアア」と激痛に呻いて仰け反る。

今更だがボイス選択を誤ったかなと、緊張感が張り詰めた戦闘の場ではそぐわないことを思いながら、回復アイテムを使用する。カナメのHPが全快。

キャラクター作成時に掛け声などのボイスを選択できるのだが、少しサンプルを聴いただけであまり深く悩まずに決めたせいか、思ったよりも声が野太い。渋いオヤジといった類の声だ。

見た目は青年であるカナメが「ウオリヤ」と発するのはギャップが大きい。

俺が初期選択の失敗を後悔していると、

『カナメ、タゲ外れてる。変な妄想してないで集中しろ』

ネピアの言葉で、巨大甲冑が俺に背中を向けてるのに気付き、慌てて剣士のスキル【挑発】を使用した。否定は後だ。

カナメは両手を広げて無防備であることをアピールすると、ナメられて腹を立てたかは分からないが、動く甲冑はこちらを向いて重い足取りで近づいてくる。

中身のない白銀の甲冑は、本来手が出ている部分に剣を浮かし、本来頭があるはずの部分には青白い炎が揺らめいてる。

首無し騎士【デュラハン】。こいつが現在俺たちが戦っている相手だ。

再び俺を攻撃するデュラハンの攻撃を受けては回復する作業に集中。スキがあればカナメも攻撃に参加して少しでもHPを減らす。今も思い切り振り下ろした剣が神殿の石床に突き刺さり、引っこ抜くスキが出来た。

言い忘れていたが今俺たちがいる場所は廃墟と化した神殿だ。朽ち果てて所々崩れた壁や床がそれを物語っている。

『カナメ、最近夜も暑くなってきたな』

.....

『ああ』

俺は短く返した。

『こっちはボロアパートだから、暑くて困る。夏は暑く、冬はすきま風で寒い。最悪』

.....

『ああ』

俺は“A”を二回押して返した。

『扇風機は点けてるけど、それでも暑い。パソコンの熱もあるし』

.....

『ああ』

『カナメの部屋はどう？ エアコンがあったりするの？』

.....

俺は再び剣を突き刺したデュラハンのスキを狙って、キーボードを打つ。馴れとは恐ろしいもので、ゲームを始める前と後ではタイピングの早さは、ビフォーアフターの動画を撮っておきたかったくらいに違う。

『んな質問返せる状況か！ 急に世間話を初めてどういっつもりだよ！ こっちは敵を引き付けて、回復するのに必死なんだから勘弁してくれ。ああ、今エアコンで快適だ！』

俺は怒気を込めたつもりでチャットを返した。そしてすぐにコントローラーを持ち直して回復アイテムを使用する。危なかった。一回で半分近くHPを減らされるから回復を怠るとカナメは地に伏すことになる。

『返せてるけど。単調でカナメがあくびでもしてると思ったから、会話を振ってあげたのに。私の気遣いに感謝されるのは分かるが、キレられるのは心外。エアコンとは.....羨ましい。壊れる』

それはいらぬ氣遣いというものだ。あと妙な呪いを掛けないでくれ。

今の状況は、少しでも気を抜いたらカナメが倒される手に汗握る緊迫した戦いの最中だ。トイレも我慢している。

そもそも、伊織もあまり雑談をする余裕はないと思うのだが。

その伊織の使用キャラクターであるネピアはというと、先ほどから杖を掲げて野球ボール大の火球を次々と生み出しては、デュラハンの背中へと放つのを繰り返している。

突っ立って黙々と火球を繰り返す様は一見すると、単純でボタン連打で済むのではないかと思われるが、実際はそうではないとは伊織談。

この魔法は二重の魔法陣を空中に浮かび上がらせてから発動させる中級魔法で、発動するには少し時間が掛かるのだが、詠唱中に特定のコマンドを入力することでその時間を短縮できるという。

コマンドは早く、正確に入力することでより早く発動可能で、伊織は最短時間で発動している。それは対人戦では必須のテクニクだというが、教えて貰ったコマンドを見た限りでは、覚えるのも困難な長さで、素早く入力しようものなら指でも吊りそうな複雑さだった。

試しに短縮コマンド無しで魔法を使ってもらうと、二倍近い差があった。

ネピアは最速で魔法をずっと打ち続けている。デュラハンの体躯が邪魔して画面には映らないが、ボウボウと火球が命中する音が、時計の秒針のように狂うことなく一定のリズムで聞こえ続けているから、手を抜いてないのは分かる。

そのリズムを維持しながら、世間話をふっかけてくる伊織は手が三本あるんじゃないかと疑いたくなる。両手でコマンドを絶えず入力しながらできるものなのか。

『あと三週間もしたら夏休みか』

尚も会話を振ってくる。

回復中と攻撃中の僅かな合間を使い返事を打つ。馴ればなんとなるものだ。

『その前に期末テストがあるがな』

パソコンの斜め後ろの壁に張られたカレンダーの赤丸を見るだけで憂鬱になるが、かといって目を背けるわけにもいかない。

『私は別に気にしないけど』

『いや、そっちも下手したら補習かもしれないだろ』

中間テストの結果から見ると、伊織の成績はお世辞にもいいとは言えなかった。俺も似たようなものだが。

『補習なんてあった？』

『プリントに書いてただろ。赤点の奴は夏休み中、補習があると』それはもう夏休みの自由時間半分が奪われるくらいの地獄がな。期末テスト直前ともなると、これを回避するために皆必死となる。中にはヤバい雰囲気醸し出す奴までいるほどだ。

『聞いてない』

『プリントちゃんと見ろよ……今まではどうしてたんだ』

おどろおどろしいフォントで書かれていたぞ。

『授業だけで何とかなってた。……かなめは自信ある？』

『ない』

俺は即答する。あるならカレンダーに赤丸を付けて、その日の三日前から一意専心に机にかじり付くことはしない。

『それはそうだな。かなめに聞いてしまった、私が馬鹿だった』

『伊織は何か対策するのか？』

『一応。ゲームする時間がなくなるのは嫌だし』

ゲーム優先かよ……と、俺が呆れていると、突然デュラハンが剣を落とし、片膝を着いた。

『終わった』

ネピアの言葉が届いてすぐ、デュラハンの頭の部分の炎が徐々に小さくなっていき、そよ風に流されるように消えた。

直後に白銀の鎧は部分ごとにバラバラになって当然のように地面

に落ち、けたたましい音を立てた——そして、

『デュラハンより聖騎士の魂を受け取った』

そんなメッセージが流れた。

『随分と時間が掛かったな』

俺は振り向いて時計を見ると戦闘を初めてから三十分が経っていた。ふと気付くと手は汗だらけで、滑ってコントローラーを落とさなかったのが不思議なほどだ。

『普通は多人数で来る場所ではあるから』

近付いてきたネピアが言った。

無口な仲間もおらず、この場にいるのは俺たち二人だけだ。

『だったら集めればよかったんじゃないか？』

『今の時期このクエストをするのはカナメくらい。集める時間を考えたら、倒す時間の方が短いと思う』

『じゃあ、伊織のメインキャラを連れてくるとかは？ 早く済むだろう』

『“ 汝が力不足ならば同じように嘆く者達に協力を求めるのもよいだろう。結束した力は容易くは破られはしない。だが、汝に力があるならば単身で力を示さなければ聖騎士は認めてはくれないだろう”』

どこかで見たような台詞だ。

『は？』

『クエストの依頼主の台詞。まさか読み飛ばしてるの？ 漢字読めないから』

『読めるっての。で、その台詞がどうしたんだ？』

『読解力がないのかカナメは？ まあ、分かり易く言うとレベル制限があるという意味』

『レベル制限？』

『PTメンバー全員が一定のレベル内に収まってないと駄目という

こと。誰か一人でもはみ出していたら特定マップには入れなくなる。ここだと15〜30となってる」

ちなみに現在のカナメのレベルが20でネピアは22だ。

『つまり、強いキャラの手助けは不可能ってことか』

『そう。カナメが考えた卑怯な手は使えないってことだな。残念だったな藤木』

勝手に人の名字を変えないでくれ。

『とにかく、これで念願のパラディンになれるわけか。伊織の協力のおかげだな、ありがとう』

事実、たまのスキに加えていたカナメの攻撃のダメージは、ゾウの足を噛むアリ程度しかなかった。タイマンだと何時間掛かったか……その前に回復アイテムが尽きるのが先か。

しばし返答が途絶え、俺が何かあったのかと聞こうとすると、

『別に。パラディンはどうでもいいけど、クエストクリアの経験値得られるから』

『そうか。じゃ、クリア報告しに行くか』

『ようやくパラディンになれたわけだが……』

パラディン解放クエストを受けられる神殿前に出て俺は言う。

『これからどうすればいいんだ？』

思えばゲームを開始して、まずはパラディンを目指してレベル上げに明け暮れてきたが、いざ成ってみるとこれといった感動もないことに気が付いた。

外見は装備だけでしか反映されないから当然だが、カナメの見た目も変わらない。以前助けてもらったパラディンは、いかにも聖騎士という外見だったが、その装備を揃えるには時間を要するだろう。俺はゴールが遠いと分かると、途端にやる気を無くす。校内のマラソン大会も順位を諦め早々に時間内完走ペースに切り替えたくら

いだ。

『それは自由。基本的に』

ネピアが言う。いっしょクエストをクリアし、パラディンになる資格を得たが、ジョブは大魔術師のままだ。

『フリーダム！』

『それはよかった』

『いや、これはできれば流してほしかった。というか、適当な返しだな』

せめて何で英語やなん的な返しにしてくれ。温度も気持ちも含まれない無機質な文字のやり取りのはずなのに、冷めた雰囲気はつきりと伝わってくるのだが。

『M M O R P G は一般的なゲームと違って基本的にはE D がないから終わりがいい。だから、自分で何を目指すか決めるのが普通』

確かにE D が用意されてるならそれを目指す人が多いんだろうしな。

『伊織は何を目指してプレイしてるんだ？』

『カナメは人の意見を聞いてから、それに合わせるタイプだな。自分の遺志がない』

……俺は言葉に詰まる。遺志が全くないことはないが、余程押し通したくない限りは、周りの意見を聞いてから無難に答えてしまう。まあ、悪いことじゃないと思う、協調性があると言ってくれ。

『……俺はまだこのゲームについて詳しくないんだ。具体例を知ってから決めてもいいと思うが』

ネピアは鼻で笑う。伊織がキーボードに設定しているショートカットに興味がある。

『屁理屈。ま、特別に教えるけど、私はレベル99を目指してプレイしてる。今のところは』

『その理由は？』

『面白いから』

『は？』

『それ以外に必要？ ゲームは楽しむためにするものでしょ』

『そりゃまあ』

ゲームは趣味以上には滅多になるものでもないし、趣味は楽しむためにある。間違っではない。

『ま、一応の目的としてゲーム側が用意しているのもある』

『なんだ？』

『ストーリークエストは受けたことある？』

『いや。あるのは分かってるがまだ受けてはいない』

クエストには二種類あって、さっきクリアしたような、一つのクエスト内で完結するのが一般クエストで、物語の一章、二章のように連続性があるのがストーリークエストである。

『ストーリークエストを進めていくのが、ゲームの目的の一つ。クリアしていけばEDらしい内容のイベントも用意されてるみたい』

『もう見たのか？』

『まだ。クエストをこなしていくと請け負うのに条件が加算されてくから』

『条件？』

『ストーリークエストを進めていくと、所属する国を選んで、稼いだポイントを国に献上して発展させていくんだけど……ここまで理解してる？』

『一応は。ポイントは持ち金表示のところにある“P”ってのでもいいのか？ どうやって手にはいるかは分からないが』

今も微々たる数字ではあるが、溜まっている。

『冒険者協会に行けば説明聞けるけど』

『俺はそこに入ったことないが』

ネピアはやれやれと言うように俯き加減で首を左右に振る動作をする。

『……まあ、それは後で自分で聞きにいつて。話を進めるけど、ストーリーを進めるには途中から、献上したポイントの合計が関わっ

てくる。私が所属してる国はポイント稼ぎにくいから」

「だから、まだ請け負うことができないってわけか」

「そう」

「所属してる国によって稼げるポイントが変わるのか？」

「一番効率よく稼げる方法が他国との合戦で活躍することだけど、小国だから合戦がない」

各国に所属するプレイヤー同士が専用マップに集って戦うのが合戦だったな確か。領土賭けての争いで、勝てば相手の領土を奪うことができる。その領土は区分けされていて、一つしかない国は合戦を行うことはできない。だったはず……ってことは、

「何でそんな小国を選んだんだ？」

「人が少ないから」

すぐにそう返してきた。サーバー選択と同じ理由か。

「人が多いのが嫌なのか？」

「それもあるけど、多い所はつまらない人ばかりだろうから」

つまらない人か……何となくだが理由は分かるような。いつも輪の外にいたからな、多くの人の輪に加わってる奴をつまらない人だとは言わないが、俺はその輪の中に加わりたいとは思わなかった。外れた側の強がりなのかもしれないが。

「その国はどうなんだ？」

伊織はしばし考えるような間を置いてから、

「変人しかいない」

そう断言した。

「いや、それは言い過ぎじゃないか？」

「全員知ってるわけじゃないけど、領土も施設も場所も最悪でメリツトもない国を選んだ時点で十分変人だと思うけど」

「場所って、何ていう国なんだ？」

俺は聞いてから、引き出しにしまっておいた“エタナリア”完全マップを取り出した。CROSS・FANTASIAの舞台となる架空世界の地図である。やや大ざっぱであるが地名などは全て記さ

れている。

『バルム』

返答を見て俺はまず首を捻った。地図をたまに眺めていたから、地名は結構覚えたりもしたが、知らない地名だったからだ。

現に地図を注視してみてもバルムは見つからない。

『どこにあるんだ？』

『一番左上』

地図の角に目を凝らして見るとようやく発見した。山と山の間に挟まれる形でバルムと地名が小さく書かれている。

『そんな国があったとは……』

『クエストがらみで立ち寄るところでもないし、知らない人もそれなりにいると思う』

山越えがパツと見て三つはあるようだし、困難な道のりを超えてくる人も少ないだろうし、ましてやそこを所属国にするというのは、確かに変人かもしれない。

『というか、伊織もそこに所属してるんなら自ら変人と言ってることになるが』

茶化すように俺が言うと、

『そうかもね』

肯定するのか。

『別に私はそう思われても構わない。そうじゃない人と付き合うのは疲れるだけ』

それは現実の人付き合いのことも含まれているように思えた。

『じゃ、俺と話すのは疲れるのか？』

休み時間や、昼休みにはコレについての話題を俺から振ってるが迷惑だったかもしれないと不安になった。

『かなめは自分が変人じゃないと思ってるのか？』

どちらかというと平凡な人間だと思っている。少々人間関係が希薄だったりするが。

『まあ、そうだな』

『かなめがそう思うならいいんじゃない』

なんか投げやりな言い方だな。

『……かなめと話すのは疲れる。別の意味で。けど、嫌ではない』
別の意味とはどういう意味かは分からないが、俺は安堵する。

『俺もバハルムに所属するかな』

わざわざそこを選んだ変人たちというのも気になるし。何よりは
伊織が所属してるなら俺もそうしたい。

『苦労するだけ。ゲーム的にだけ』

『そうかもしれないが、その方が面白そうだし。伊織はどうなんだ？
面白いかな？』

俺が聞くと、思い出でも振り返っているのか返答に間を置いてから、

『一応は』

『そりゃ、ゲームは楽しむもの。だしな』

『うん』

『それじゃ、当面の目的はストーリーを進めることだな。所属国決め
めるようになるにはどこまで進めればいいんだ？』

『五回目のクエストまで。カナメの強さなら簡単に済ませられると
思うけど、もう一つ。レベル上げもしたほうがいい』

『何故だ？』

『バハルムにたどり着く必要があるから。推奨レベルは五十だけど、
通り抜けるだけなら三十くらいあれば大丈夫だと思う』

ちなみに現在のカナメのレベルは二十だ。低い頃は時間も掛から
ずにハイペースで上がっていたが、上がるにつれ一時間が二時間に、
二時間が三時間にとペースが鈍ってきた。伊織に言わせればMMO
RPGの常識らしいが。

『何日掛かるかな……』

『かなめのプレイ時間なら効率良くて一週間程度で済むと思う』
伊織が言うのならそうなのだろう。このゲームの知識に関しては
圧倒的に上だ。テストにCROSS・FANTASIAの問題が出

たら満点に違いない。あいにくそんな問題が出る可能性は万に一つもないが。……ん、テスト？

俺は振り返ってカレンダーの赤丸の位置を確認してから、

『期末テストがあるのか』

『さつき自分で言ってたけど。ボケたの？』

ちよつとだけ失念していたがボケてはいない。ここ一週間の朝夕の献立もそらで言えるぞ。今日の授業内容よりは自信がある。

『テスト期間中はプレイする余裕はないな。間違いない』

ゲームをしてたら詰め込んだ内容がポロリしそうだし。

『ぶつつけ本番で望めばゲームできるけど』

『おお。その後、できなくなるけどな。伊織がしたらどうだ？』

何が悲しくて夏休みに登校しなきゃならんだ。高二的夏は留年しない限り一度しかこないというのに。

『私は補習は嫌だから。カナメ一人で受ければ』

最悪、本当に教師（男・三十代独身）とタイマン指導になる可能性もある。それは是非とも避けたい限りだ。海だとか山だとかデートとか高望みはしないが、せめて家でダラけることに時間を活用したい。

『誰だつて嫌に決まってるだろ。夏休みを犠牲にするよりは、そうならないようにテスト勉強に時間を割いた方がマシだ』

そう送ってから、俺はふと頭に浮かんだことを伊織に伝える。

『そうだ、よかったらいっしょにしないか？』

その方が捗るのは坂本で証明済みだ。

『何を？』

少しして伊織は聞き返してきた。

『テスト勉強だが』

そしてまた間があり、

『主語を入れる』

言葉と同時にネピアはムツとした表情を浮かべた。抜けてたのは悪かったが、話の流れからして分かると思うが。伊織は誰かと協力

することとかもなかったのかもしれないし、思い当たらなかったのか。

『悪い。で、どうだ？』

『かなめの部屋でするの？』

俺は心臓が高鳴った。俺の部屋に家族以外の異性は入ったことがない。少し妄想が膨らむ。

『嫌なら伊織の部屋か、どこか、図書館とかでもいいが』

『かなめの部屋でいい』

すぐさま答えが返ってくる。まさか、そこまで俺の部屋に興味があるとは……

『エアコンがあるし』

あ、それが目的か。

『冷えた炭酸とアイスもあるし』

……え？

『ケーキもあるし』

……

『豪勢な夕食もあるし』

……

『出来る限り用意させていただきます』

『冗談』

画面の前の伊織はどんな顔でタイピングしてるんだろうか。クスツと悪戯っぽい笑みでも浮かべてたりしたら、是非見てみたいな。

『少なくともジュースくらいは用意はしとくつもりだ。で、いつにする？』

『日曜』

期末の前日か。スーパーの特売のワインナー並に詰め込めるだけ、テスト範囲内の知識を詰め込む日だな。

『分かった。日曜だな』

第十四話『テスト勉強、始めました』

日曜日。この日曜日は今年度過ごしたどの日曜日よりも重要で、次の月曜日はどの月曜日よりも憂鬱だ。

俺が選挙に立候補する時は、マニフェストに期末テストの根絶を掲げよう。全国の落ちこぼれ高校生の支持を集められるだろう。選挙権ないが。

そもそもテストという制度自体が必要ない。点数で人を判断するな。友達の多さで人を判断するな。

「……ふう」

そんな現実逃避をしても仕方ない。

俺は部屋の掃除を再開する。

これは決してここ数日の参考書とのにらみ合いから目を逸らすための行為ではない。

これからこの部屋に初めて訪れる友人がいるから、片付けているだけだ。普段より念入りにな。

ガラス製の机は丁寧に磨かれ、これまたガラスクリーナーを吹きかけて拭かれた窓から入る真夏の日射しを反射している。

絨毯も一心不乱に粘着ローラーを何往復もさせ、ペットの毛一つない。ペット飼ってないが。

さて、伊織はこの美しい部屋を見たら、片付けの素晴らしさに目覚めるのではないだろうか。二週間くらい前に伊織の部屋に久々に行ったときは、時間が俺が初めて来る前に巻き戻ったかと思えるような惨状だったが。

俺は一旦部屋の外に出て、部屋全体を見回して満足げに頷く。時計を見ると始めてから二時間が経っていた。

いやはや、熱中して時間の感覚がなくなっていたらしい。念を押すが決して逃避ではない。伊織も綺麗な部屋で勉強したほうが捗るだろうと思って、貴重な時間を割いていただけだ。……ほら、あま

り根詰めてやるのも逆効果になりかねないし、息抜きも大事だし……

——ピンポーン

何の変哲もない呼び鈴が階下から聞こえた。

恐らくは伊織だろう。向かいに行く必要もないくらいに近い距離だから、直接来ることになっていた。

俺はもう一度部屋を見渡し、招き入れるに問題がないのを確認してから階段を下りる。時計は約束した時間の五分後を指していた。

「はい！」

下りる途中、ひよりの元気のいい声が聞こえた。リビングにくつろいでいたひよりが一足先に玄関に向かったに違いない。

別に、俺にバレたら人々の視線が南極大陸のように冷たくなるやましい秘密はないが、ひよりが余計なことを言わないか不安に駆られ、俺は早足で玄関へと急ぐ。

「ほえ〜」

リビングから玄関を繋ぐ廊下へと出ると、ドアを開けたひよりの気の抜けた声を上げた。俺は思わず足を止める。

ひよりより頭一つ背が高い伊織と目があつた。一日のうち九割は浮かべているであろう見慣れた無表情。首を僅かに傾げた。

「あ、えっと、かなめの友達ですよね？」

興味深げに伊織を見上げていたひよりがハツとして聞いた。今日は友達とテスト勉強に勤しむから邪魔をするなどは予め忠告してある。面識のある坂本なら相手が坂本だと伝えるし、勘の良し悪しは関係なく、その相手が以前に探られた新しい異性の友人だとは気付くだろう。

伊織は俺にちらつと視線を向けてから、ひよりを見て首肯した。

「早崎伊織。かなめの……友達。一応」

少し緊張してるような固い声で伊織は名乗る。一応というのが気に掛かるが、まあいいか。

「伊織さんですね。あ、どうぞ。かなめなら——あ」

ニコニコと人懐こい笑みを浮かべてひよりは伊織を迎えて、ようやく俺に気付いた。俺は玄関へと歩み寄る。

「よう」

ひよりの手前というのは関係なく、どう挨拶したらいいか困り、俺は片手を上げて素っ気なく言う。

「こんにちは」

俺は正直驚いた。始めて伊織からまともに挨拶を返されたのだから。学校じゃ『おはよう』と言つても……『おはよ』と寝起きのような小声でしか返さないのにな。

「じゃあ、俺の部屋に行くか」

「そう」

と、伊織は言つて、片手に下げた紙箱を俺へと差し出した。

「あ……これ」

「マカマカの！」

俺が受け取った紙箱を見て、隣でひよりが嬉々とした声を上げる。顔を見ると瞳が宝石のようにキラキラと輝いている。

このデザインの紙箱を使う店のスイーツはひよりの好物だ。

「別に気を使わなくてよかったんだが」

単に勉強するだけだしな。坂本ならフリーパスで入ってくるし。

「それがマナーだと見たから。ネットで」

「そういうのは目上の相手の家に訪問する時のマナーだと思うが」
約束の五分後に来たり意外に律儀なんだな。それともどんな風にしたらいいか分からなかったのか。友達の家に来たのは初めてなのかもしれないし。

「そうなのか」

伊織は理解したように言い、

「かなめは何も持つてこなかったけど？」

「え……俺、目下に見られたのか!？」

「冗談」

素っ気なくそう返し、伊織は靴を脱いで家にかかる。

「お邪魔します」

「ああ。と、ひより、これ冷蔵庫にでも入れといてくれ」

ケーキが入った紙箱をひよりへと渡す。

「あ、うん」

受け取ったひよりは紙箱に視線を落として数秒。迷ってるような目だったのを見て、俺は伊織に、

「何個買ったんだ？」

「五つ」

俺の家族分と自分のといったところか。

「じゃあ、一つだけ食べてもいいぞ。一つだけだからな」

念を押しかないといざ食べようとしたら空の箱しか残ってなかった。ということが本気であり得るからな。

「ホント！？　ありがとうございます」

ひよりは真夏の太陽のように眩しい笑顔になり、伊織へと勢いよく頭を下げてから台所へと駆けていった。

「かなめに似てないな」

一瞬で奥へと消えた方を見ながらぼそりと伊織は感想を述べた。確かにあのハツラツつぷりは俺にはないものだし、容姿も俺とは似てるとは言い難い。性格は父似で容姿は母から受け継がれたといった所だ。

「そうかもな」

俺は苦笑し、

「義理？」

俺は吹き出した。唐突に何を言いますかあなたは。

「血は繋がってるに決まってるだろ」

「そうか。残念だったな」

何が残念なのか俺には伊織の考えが理解できなかった。

俺の部屋を見た伊織は特に感想を述べることもせず踏み入ると、

短めのスカートを押さえつつゆったりとした動作でベッドのそばにしゃがみ込み、這いつくばるようにその下をのぞき込んだ。

俺はいっしょに持ってきたジューズとコップを置きながら、その様子を黙って見守る。はてさて何を探しているのやら。小銭でも落としたのだろうか。

入念にベッド下を見回した後、伊織は顔を上げ、

「ない」と一言。

「何がだ？」

俺は分からない風を装い聞いた。見当は付いている。

「エロ本」

恥ずかしがることもなく堂々と伊織は答えた。

「少しは濁せよ……」

「女の裸が満載の雑誌」

「……余計に駄目になつたな」

伊織はなおも証拠を探す捜査員がごとくベッド周りを入念に調べている。

「なんで、そんなもんを探してんだ？ まさか、読むつもりじゃないだろうな」

読むより見るといった方が正しいだろうが。

「隠しアイテムは見つけたくなるのがゲーマー」

真剣な顔で伊織は言う。この気持ちは理解できなくて当然だし、あまり理解したくないな。

「それが役に立たない、例え無用の長物でもね。……ま、かなめの弱みを握れるかもしれないし、あながち無駄ともいえないかも」

「いや、無駄だぞ。幾ら探そうとも出てこないからな」

自信満々に言いながら、怪しい品を隅々まで搜索されても悠然とした態度を崩さない会社社長の気分が分かった気がした。

そうだ。実はある。

俺は健全な思春期真っ盛りの男子だ。一冊だけが所持してはいない。他にも数冊あったのだが、以前に帰宅したら机の上に置かれて

いたことがある。

犯人は母——ではなくひよりだった。頻繁に無断で入ってくるから隠し場所には受験勉強以上に頭を悩ましたが、妹の勘の鋭さを見誤っていた。

その後の関係は、発見された本の処分によって保つことが出来た。そして、唯一難を逃れた一冊が残った。

勘のいいひよりでも見つけれなかったソレを伊織に見つけられるわけがない。

「そう。アナログな物は持っていないのか。あるとしたら」

と、伊織は机上のノートパソコンに視線を向けた。

「まあ、そうだな」

俺はアツサリと認める。以前に疑惑を掛けられ結局否定しなかったしな。実際は何かと危ないと聞くし、そこまで活用してるわけじゃないが、下手に説明して現物探しを続けられるよりはいい。

「そう」

淡々とした様子で伊織は探すのを諦め、テーブルの前に置かれたクッションに座る。

「つか、それよりも今日はやることもあるだろ」

話を打ち切るように俺は言い、伊織の対面に座る。今日は朝から勉強に集中していたから必要な物は既に置かれている。

「分かってる」

伊織は脇に置いていた手提げバッグを探り、ノートではなく、折り畳み式の機械を取り出し、目の前に置く。

「何だコレは」

俺は置かれた鮮やかなピンク色の機械を指す。電子辞書だろうか。「マントンドー3DS」

満天堂といえば有名なゲーム会社だとは知っているし、こうして実物を間近では初めてみるが、人気の携帯ゲーム機を販売していることもニュースで見たことがある。それはいい。

「勉強しに来たんだよね？」

確認するように俺は聞いた。

今日は期末テスト直前の最も重要な日だ。今日を疎かにただの日曜日として怠情的に過ごした者は明日泣くことになる。

俺より中間の総合点が悪かった伊織がゲームにかまけてる余裕はないはずだが。現に最近はログインしていなかったし。

ああ、単に確認しただけだ。もし伊織が遊んでいたら注意するつもりで。決して集中力がないわけではない。

「当たり前。そういう約束だったけど？　もしかして……かなめは別の目的で呼んだのか？」

と、伊織は表情は無感情のまま、自分の体を守るように胸の辺りを腕で隠す。押さえつけているせいで白磁のような腕が胸に僅かに沈み込み、それに合わせて柔らかく形を変える――むにゅり――そんな擬音が似合いそうな……って違う。

「別のことをするつもりなのはそっちだろ。ゲームなんかしてる場合か」

「かなめは本当に知識に乏しいな」

伊織はゲーム機を手にとってゲームソフトを取り出し「ん」と、小さなソフトの表面を見せつけてきた。俺は目を凝らしてそれを見る。

「“燃えたん”？」

俺は炎をバツクに赤い文字で書かれた（見づらい）タイトルを読んだ。毛先が凶器になりそうなくらいにツンツンと尖った赤い髪が特徴的な、少年漫画の熱血キャラっぽい少年がペンとノートを持っている絵も描かれている。

「なんだコレは？」

「かなめはボキャブラリーがないな」

確かに二度目の『なんだコレ』だけでも、他にどんな反応を見せればいいんだ。

「……な、な、なんだコレは!？」

試しに驚愕の表情を浮かべてみた。

「英単語を学べるゲーム」

淡々と伊織は言った。俺の驚愕はしまっていていいか？ 必要なかったみたいだし。

「これでか？」

疑わしき品を見るように俺はソフトを眺める。

「ストーリー形式になってて、熱い展開に燃えながら自然と英単語が身に付いていく。と売り文句にある」

「こんなので身に付くのか？」

「かなめは頭が固いな。最近はゲームで学べる時代。真剣ゼミでも取り入れてるらしいし」

真剣（と書いてマジと読む）ゼミでもか。わりと有名な通信教育教材だ。

ダイレクトメールで届けられる販促のマンガには、真剣ゼミを始めただけで、冴えない少年がクラスの人気者になって人生の勝ち組に成り上がるという、いわば使用前使用後の広告的な胡散臭さがあったな。

「なんか余計に疑いたくなってきたんだが」

「実際、役立つとは言えない」

伊織はあっさりと認めた。

「所詮ゲームだし」

続けて言い、ゲームを鞆にしまい代わりに伊織はノートと教科書を出してテーブルに置き、スカートのポケットからヘアゴムを取り出して、邪魔にならないようにだろつか長い黒髪を後ろで一つに束ねた。

「……なに？」

俺の視線に伊織は怪訝そうに目を細める。

「いや、なんでもない」俺は首を振って「じゃ、始めるか！」

俺は慌ててシャーペンを持ち、ノートを開いて視線そこに落とす。チラリと伊織を窺うと、教科書を開いて早速始めようとしている。

いわゆるポニーテールにした伊織の印象は、普段と五十度くらいは違っていた。

纏めたことで、いつもは黒髪に隠れがちで暗い印象を与えている顔がよく見えるようになり、整った顔立ちがより分かる。

もし、この姿で登校したならば一日にして伊織のイメージは改善するのは間違いない。

——つい、見とれてしまっていたことは否定できない。

俺は勉強の方に集中できるのか不安になりながらも、ペンを走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2812x/>

ネットゲーム、始めました

2012年1月8日01時51分発行